ギルド受付嬢の冒険

東風になりきれない春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ギルド受付嬢の冒険

【Ｎコード】
Ｎ３０９２Ｙ

【作者名】
東風になりきれない春

【あらすじ】
クレセント王国とグランティオス帝国の戦争から５００年後。
『青の森の魔女』が活躍した時代から５００年以上すぎた今。
ひとりの少女が冒険者ギルドで受付嬢をしていました。
目的？　学費のためですがなにか？
そんな彼女がとある冒険者と出会ったことで、次々と変化していく話。

第一章　主な登場人物

～登場人物紹介～

・クリス＝ルクス　１６歳　女
男爵令嬢。でも土地があるだけ。お金はない！学費はギルド受付のバイトで稼いでます。
水の大精霊ウンディーネとの契約者。

・ヴァーヴァティ　１９歳　男
樹海で冒険者に拾われ、育てられた捨て子。
冒険者ギルドで唯一のＡランク。本名は長いので「ヴァン」と略している。

・ウンディーネ　年齢不詳　女
水系統の精霊の中で一番力を持つ精霊。
生まれたばかりのクリスの魂が水色だったので、水を司る存在として好感を持つ。
そのままそばで成長を見守るために無断で一方的に契約。

・名無し　年齢不詳　男
最近各地で起こる魔物や精霊の暴走事件にかかわっている青年。
とても強い魔法使い。

・エレオノーラ　年齢（三十路＋５００年程度）　女
かつてのクレセント王国の公爵夫人。

蒼の森の魔女と呼ばれ、絵本などにも登場する有名人。

・マリー　三十路～四十路前半　女
冒険者ギルドで昼番をしている女性。
クリスと同じ年頃の娘がいる。

クレナダの死霊　？

「――そして魔女はつよ～い錬金術で悪者をやっつけました。王国は平和になり、めでたしめでたし」

絵本を閉じて、こちらに微笑みかける母親の膝にすがった。

幼いクリスは青の目を細めて頬を染めて喜ぶ。

「すごいねえ、すごいねえ！いいなあ・・・このあと、おひめさまになるんでしょう？」

「そうよ、クリス。彼女の子どもたちがクレセント王国の王族と結婚することが多かったのですって」

「けっこん？」

「クリスが大きくなったらわかるわ。ずっと好きな人と一緒にいられるように、誰でも使える魔法よ」

クリスは「けっこん」と呟きながら、絵本の表紙をなでた。

『蒼の森の魔女（あおのもりのまじょ）　3巻　ダニージョ著』

むずかしい文字が多くてクリスにはすべて読み取ることはできなかったけれど、きらきらした絵本の世界は知っていた。

「わたし・・・大きくなったられんきんじゅつしになるわ！」

薄紫の髪の毛の頭をあげて、無邪気にクリスは笑った。

「クリス＝ルクス！立ちなさい！」

クリスはびくりと身を震わせて目を開けた。

どうやら授業中に眠ってしまっていたらしい。

教卓の前の歴史の講師は、彼の背後の黒板をたたきながら言った。
「立って、ここから１００年前後の歴史を説明すること」
「はい、先生」

失敗した・・・と思いながら、クリスは立ち上がって黒板に書かれた文字を読んだ。
「グランティオス帝国からの宣戦布告により、クレセント王国と帝国は戦争がはじまりました。戦争は7～8年ほど続いたと言われています」
「はい、よろしい。ではその後は？」
「はい、先生。その後は蒼の森の魔女の活躍により、クレセント王国が勝利します。そして帝国と合併して現在のモナド皇国になりました。現在の皇帝陛下は彼女の子孫で、５３代目。モナドは約５００年ほどの歴史を持つ国家です」

クリスの回答に講師は満足げに笑った。
「よろしい。付け加えるなら、蒼の森の魔女が嫁いだ先の公爵家が保有する騎士団のことも説明できれば満点ですよ。充分及第点ですが、授業は真面目に聞くように」
「はい、先生」

クリスはこれ以上失態を重ねないように従順にうなずいた。

授業が終わると、クリスは下校していくクラスの友人たちの波に逆らって別の校舎へ歩き出した。
後ろから友人が声をかけてくる。
「クリス？また錬金術学科に行くの？」
「そう。じゃあ用がないなら、私は行くから」

きっぱりと言い捨てて、クリスは颯爽と歩き去った。
クラスメイト達は顔を見合わせて、
「さすが鉄面皮。冷たい女だよなあ」
「あら、優しいわよ。このあいだ授業で当てられたときに、こっそり答えを教えてくれたもの」
「そうね。でも言い方がちょっときつくない？」
と、口々に不満を口にした。

クリス＝ルクスは成績優秀な特待生としてモナド国立魔術学校に在籍している。
実家が男爵家だが貴族の一端とは思えない貧しい暮らしなので、学費はアルバイトで支払っていると噂されていた。
クラスメイト達はそれが噂ではなく事実だと知っていたし、そのアルバイトが夜遅くまであるために寝不足になっている彼女を心配してもいた。

しかしクリスはそれらの気遣いを受け取らず、浅い交友関係を続ける少女だった。

クリスが錬金術師学科の学舎にたどりついたとき、ちょうど補習時間を知らせる鐘が鳴った。補習のない生徒にとっては下校の合図でもある。
クリスはそっと裏口から入って、近くの教室に入り込んだ。幸いまだこの補習の講師は来ていないらしい。

クリスは魔法学科の生徒である。
しかし好きな教科は錬金術だ。

それなら錬金術学科に入学すればいいと思われがちだが、実家の財政と学費のことを考えて授業料が半額に免除される特待生度をとると決めた。
特待生になるためには入試で1位から3位までのあいだに入らなければならない。
好きな錬金術よりも、魔法の素質の方が高かったクリスは泣く泣く魔法学科の門をたたいたのだ。
ただ諦めきれなくて、魔法学科の授業が終わった後に錬金術学科の補習にもぐりこむのが日常化していた。

クリスは目立たない端の席に座りながら、そっと右太ももに水色で刻印された紋をなぞった。
それもこれもすべて、この紋に宿る精霊のせいとも言える。
「やりたいことと、できることが違うって切ないわ」

クリスは１６歳にしては大人びたため息をついた。

錬金術学科の補習が終了し、クリスが学校の門をくぐるころには空は茜色から藍色へと変化する間際だった。
クリスは空に浮かぶ2つの太陽の位置を確認しながら、足早に学校からの狭い通学路を抜け、皇都の大通りへと出た。

空が藍色に染め上る少し前に、クリスは役所のような白い建物の前にたどりついた。
―――冒険者ギルド。
５００年前の戦乱時に職を失った傭兵を集めて、街の復興をはじめたのがきっかけで創立された組合である。
１０歳から登録可能な職業案内所のような場所だ。

しかしなかには相当難易度の高い魔物を狩るような依頼もある。
それらを目当てにする冒険者が多いことから、ただの組合ではなく冒険者ギルドと呼ばれるようになった。

クリスが中に入ると、受付にいた女性が立ち上がった。
「ああ、今日も間に合ってよかったわね」
「はい。マリーさん」

マリーはギルドの午前から夕方までの受付を担当している。
入れ替わりに夕方から扉を閉める夜中までがクリスの受け持ちだ。
夜の方がアルバイト代が高くなるのでクリスは万々歳なのだが、同じような年頃の娘を持つマリーはいつも心配そうにクリスを見る。
夜に来る利用者は魔物狩りで生計を立てているような乱暴者が多いせいだ。

ただ彼らに何を言われても、クリスは平然としている。
職務に忠実で真面目に、今日もお金を稼ぐだけだ。

2つの月が真上に差し掛かったころ、そろそろ業務を終了するかと職員と話していた時に彼はやってきた。
「おい・・・Aランクのヴァンだぞ」

背後で職員の男がぼそりと呟いた。
ギルドが依頼する案件はランク分けされている。
ランクE・・・子供のお使いレベル
ランクD・・・薬草や鉱物の採取
ランクC・・・害獣や低レベルの魔物の退治
ランクB・・・遺跡の調査隊の護衛や、高レベルの魔物退治

ランクA・・・災害規模の魔物退治
ランクS・・・前人未到
という具合だ。

魔物は瘴気というよくわからないが、よくないものに侵された動物のなれの果てらしい。
クリスは実際に見たことはなかったが、ギルドに来る冒険者たちの話からかなり危険な生き物だと認識していた。

その危険な生き物のなかでも、かなり強いものを倒したのがこのヴァンという男らしい。
クリスが受付のアルバイトを始めたときには、すでに彼はAランクに君臨していた。
Bランクに到達する冒険者はいても、Aランクは彼一人だ。
どれだけの難関かわかろうというものだ。

しかしその武功に反して、彼は茶髪に青の瞳。整っているが、やや軽薄そうな顔。
そしてやたら背が高いだけの普通の青年に見えた。
手に持っている魔法陣を刻んだ特殊そうな幅広の剣が不似合いだ。

だが、相手がだれであれ、仕事は仕事。
クリスは受付の席から彼に声をかけた。
「もうすぐ終了です。依頼完了の報告ならこちらへどうぞ」
「・・・ああ、悪い悪い」

青年は受付の台の上で、依頼完了の契約用紙を取り出してサインした。
名前は先ほど職員が言っていたように、ヴァンで間違いないようだ。
クリスはほかに記入漏れがないか確認したあと、保管していた用紙

を取り出す。
こちらはヴァンが仕事をこなした依頼を申請した契約用紙である。
申請の用紙と、完了の用紙を見比べて間違いないか見直す。
内容はBランクの魔物が徘徊する遺跡の調査員の護衛。
何も問題がないとわかると、さっさとクリスはギルドの了承印を押した。
「お疲れ様でした。依頼金はこの用紙を持って向こうの机でお受け取りください」
「わかった」

ヴァンはそう言ってさっさと去って行った。
それを見送ったクリスはほうっと体の力を抜いた。
「仕事の内容はすごいけど、Aランクでも普通の人じゃない・・・緊張して損した気分」

ギルドを後にしたヴァンは、依頼金を懐におさめながら思い返した。
Aランクということでやっかみ半分にからまれたり、職員の対応が妙に丁寧になったことはあったが、今回はたんたんと事務作業が進んだだけだった。
言葉のやり取りも必要最低限のみ。
「珍しいこともあるもんだな。ま、俺にはそっちのが楽だけど」
そう言ってヴァンは皇都の宿通りへ消えていった。

クレナダの死霊　？

その日もクリスはギルドの受付の夜番を務めていた。
ギルドの依頼掲示板の前に立って、依頼内容を訂正した新しい紙を張り付ける。
この依頼はもう1か月ほど掲示板に掲載され続けていた。内容は少しずつ更新されているものの、誰も達成できていない。

最初の依頼内容はモナド皇国北部にあるクレナダという村から、魔物が現れたかもしれないので調査してほしいというものだった。
魔物退治ではなく調査が目的だったので、Cランクに割り振って掲示板に掲載。
しかし依頼を受けた冒険者たちは帰ってこなかった。

そこで魔物の調査および村民と冒険者の安否確認のために、Bランクに内容を引き上げて掲載したが結果は芳しくなかった。
Bランク冒険者のなかでも古株で有名だったパーティだが、生きて皇都の地を踏めた者はひとりだけ。その彼もギルドにたどり着く前に街道で死亡しているのを、交易に訪れた商人が発見した有様だ。
そのことは商人が事件と見て皇国の騎士団に報告したため、なんとかギルドも把握することができた。

ここまで来ると魔物が存在している可能性はかなり高い。
それもBランクの冒険者が数人がかりで太刀打ちできない化け物級のものが。

そして先ほどのギルド内の会議で、依頼ランクはAに定まった。

「Aランクの依頼・・・あの人は受けるのかしら」
クリスは1か月ほど前に対応したことのある、世界で唯一のAランク冒険者の顔を思い浮かべた。
あの茶髪の青年はあちらこちらのギルド支部の依頼を転々としながら受けているらしく、あまり皇都のギルド本部に立ち寄らない。
けれど今回の依頼は他の冒険者では対応できないだろうから、一刻も早く彼に本部の掲示板を見てもらって引き受けてもらう必要がある。

そのとき入口付近で冒険者からの苦情に応対していたマリーがクリスを呼び寄せた。
「クリスちゃーん。雨が降ってきたから外の立て看板の回収お願い！私は手を離せないから」
「わかりました、マリーさん」

クリスはさっとスカートをひるがえしてギルド本部の建物を出た。
外に出て空を見上げると、曇天が重く立ち込めている。
心なしか空気中の水気が多いような気もした。
クリスは右太ももに描かれた水色の紋をなぞり、そっと名前をつむいだ。
「ウンディーネ、雨が降るまでにどれくらい余裕ある？」

クリスの呼びかけとともに、紋が光り輝いて空中に妙齢の女性が現れる。
彼女はクリスの契約している水の精霊ウンディーネだ。
といっても、クリスには契約を交わした覚えはない。両親の話では彼女が生まれて間もないころ、突然この契約の紋が浮かび上がったという。

精霊は気まぐれなので、ときどき人間の意志と関係なく契約を結ぶことがあるらしい。
ウンディーネはそれ以来ずっとクリスの側にいた。
クリスはその気安さゆえに「押しかけ精霊」と呼ぶこともある。
だが幼いころは姉のように慕って遊んでもらったので、ウンディーネのことは嫌いではない。水系統の魔法を使うときに制御しやすく、強力になるという利点もある。
しかも水の精霊の中でも上位に位置するらしいウンディーネは、魔術学科の生徒のあこがれの的だった。
ただ錬金術師になりたいクリスとしては、子どもっぽくも少々複雑な思いを感じているだけである。

ウンディーネは濃い青色のマーメイドラインのドレスの裾をなびかせて、空を見上げた。
魚のエラのような耳がひくひくと動いている。
彼女の体はほとんどが水分で出来ているのか、常に流形に震えていた。
「そうね～、この水の気配からすると～、たぶん1時間くらいで降ってくるんじゃないかしら～？」
作り物じみて表情のうごかない能面のような顔に似合わず、ウンディーネの口調は間延びして緊張感がない。
クリスはいつものことなので気にしないが、初めて精霊に会う人にとってはめったに会えないとされている上位精霊のイメージが崩れるだろうなと気の毒には思っていた。
ギルド内部の案内図を描いた立て看板を両手で抱えて、引きずるように中へ持っていく。

丈夫な木で出来た看板はなかなか重い。
誰かに手伝ってもらえばいいのだろうが、側にいるウンディーネに物理干渉の力はない。
かといって、通りすがりの人や冒険者に話しかけるのも面倒だ。
できるならアルバイトのとき以外で知らない人と話したくないとさえ思った。

なんとか中に運び入れると、夜明け前の空のような薄紫の髪のあいだから汗がしたたり落ちた。ウンディーネを紋の中に呼び戻してから、軽く手で汗をぬぐって受付の台に戻る。
少し離れていただけなのに、すでに数人の冒険者が並んでいた。
その中に例の茶髪の冒険者を見つけて、湖面のような瞳をまたたかせた。

入り口付近にいたはずなのに、彼が通り過ぎたのを見かけていない。
しかしヴァンは複数の嫉妬や羨望の混じった視線をあびながら、たしかにそこにいる。
クリスは気配なく建物内に入っていたヴァンに、初めてAランクの実力を感じた。

「はい、次の方どうぞ」
「この依頼を受けたいんだけど」
数分後、ヴァンの順番が回ってきた。
彼は手に先ほどクリスが掲示板に張りなおしたクレナダ村の依頼の紙を差し出した。
クリスは彼に引き受けてほしいとは思っていたが、こうも都合よく進むことに驚く。
「失礼ですが、この依頼は先ほどAランクに更新されたばかり。ど

うしてわかったんですか？」

いつもなら業務以外の言葉を発しないクリスが思わず尋ねてしまうと、ヴァンは顎に手を当てて首をかしげた。

「おかしいかな？あちこち回ってるから情報も入るのが早くてね。かなりひどいことになってるらしいし、どうせそのうち俺にまわってくるだろうと思って寄ってみただけ。更新されたばかりに来たのは偶然だね」

「情報・・・ですか」

「そうそう。行商人の噂とかすごいよ。まあ、それは置いておいて・・・これ俺が受けていいんだよね？」

ひらひらと依頼用紙を手に持って振りながらヴァンは言った。

クリスは「もちろんです」と答えてから冷静に気持ちを切り替えると、無駄口をたたいてしまったことを反省しながら依頼内容を説明した。

ヴァンが皇都のギルドで依頼を受けて数日後。

彼はクレナダ村に到着していた。しかし村に入らずに、周囲にある柵の前で立ち止まって近くの茂みに身を隠す。

村からは昼間だというのに物音一つしない。

男たちの作業する声も、女たちのかしましい話声も、子どもたちの遊びまわる歓声もない村は不気味に沈黙していた。

ヴァンは気配を消しつつ、柵の隙間から村の様子がよく見える場所へゆっくりと移動した。

途中で魔物に襲われ絶命した様子の男の死体を見つけた。

死体はすでに腐敗が始まっていて、致命傷がなにかまでは特定でき

ない。
ヴァンは男の検分を諦めて、村の中をうかがった。
遠目に広場らしき場所で動く人影がいくつか確認できる。
しかし動き方が人形遣いに操られた出来の悪い木偶のようで不自然だ。
首がかくりかくりと左右にぶれ、足はもつれさせながらさまよっている。
「これは死霊だ・・・村の中だけを死霊化させる呪いの魔法かな」
死霊は無念の思いを抱いて死亡した人の魂が瘴気にあたって魔物化したものだと言われている。
詳しいことは解明されていないが、戦場に多く出没することから推測的に間違っていないだろう。だからこそ、戦場でもない場所で死霊を見かけたら別の原因があると考える。
たちの悪いことに魔物から瘴気を取り出して、それを別の生き物に感染させる呪いの魔法があるらしい。
ヴァンは今回の事件はそれだろうと目星をつけた。なぜこのクレナダ村が呪われたのかまではわからないが、死霊の対策自体は難しくない。
死霊は生前の肉体の一部を核として残しているので、そこを破壊すれば倒せるのだ。
ただ、その肉体が内臓の一部であったり肉片だったりするので、なかなか発見できずに手こずる相手である。
一番効果的なのは魔物化させる原因の瘴気を、呪いごと浄化することだ。
ヴァンはちらりと背後の死体を振り返って、腐臭に顔をしかめた。
「俺の得意分野じゃないなあ。浄化のできる魔法使いの助っ人か、

錬金術の支援品が必要っぽい」

ひとり呟いて、さっさと撤退することに決めた。
ヴァンは力押しの物理攻撃を主とした戦闘スタイルをとっている。
魔法や錬成の技術は初級並で、使えないよりマシ程度だ。
もっぱら野宿の時に火をおこすために、炎の魔法を唱えるくらいだ。
それでも伊達にAランク冒険者をしていないと自負しているので、
無理やり村の中へ突入することは可能だろう。
だが瘴気を取り除けない限り、この村は瘴気に侵され続ける。
村人が生きているとは思えないが、生存者がいればそれも絶望的となるのだ。
しかもこの村を通りかかった別の生き物が、また死霊となるかもしれない可能性まで含んでいた。

ヴァンは村の外に放置されたまま朽ちていく男の死体を振り返り、
そっと死後の安寧を願う祈りの句を唱える。
「悪いな。早く皇都まで行ってまた戻ってこなきゃならないんだ。
悪く思うなよ」

なにかの拍子に村の外にまで呪いが及んだとき、この死体まで死霊化しないようにヴァンは男の周囲に枯枝を置いたあと、短い呪文を唱えて剣先に小さな炎をともして燃やした。
もともと魔力量が少ないヴァンは、初級魔法でもこうして剣に刻まれた増幅作用のある魔法の軌跡を必要とする。
枯れ木に燃え移った炎は風にあおられて、男の体を包み込んだ。
死体の欠片も残さず燃え尽きれば、死霊となるときに必要な核もないために瘴気にあたっても魔物化しない。

人間の焼ける嫌な匂いもやがて風にまぎれて消えていった。
ヴァンは完全に灰になったのを見届けると、皇都へ足早に戻った。

クレナダの死霊　？

「え、私がですか？」
クリスはヴァンの申し出に小首をかしげた。
クレナダ村の現状はたった今ヴァンから報告を受けた。
背後にある会議スペースで上司たちが今後の対応を話し合っている最中に、受付の台越しに向かい合ったクリスは、ヴァンから「助っ人として同行してくれないかな」と頼まれたのだ。
「私は冒険者ではありません」

クリスはきっぱりと断った。
たかが１６歳の学生が、死霊はびこる村まで魔物退治に行けるはずがない。
しかもパーティを組むのはギルド最高峰Ａランクのヴァンである。
足手まといにしかならないだろう。
しかしヴァンは緩く首を振って苦笑した。そして自身の後ろで相変わらず嫉妬と羨望の混じったうっとうしい視線の先の数人を指さす。
「俺が声をかければあいつらのうちの何人かはついてきてくれるだろうな。けど、俺が欲しいのは浄化のできる魔法使いか、その手段を知ってる錬金術師だ。実力を監視したり、物見遊山でついて行きたいやつらは御免だな」
「でしたら、腕の立つ魔法使いをお探しになったらいかがですか？ヴァンさんがギルドに登録されてから１０年以上たっていますし、心当たりの方もいらっしゃるのでは」
「いないこともないが時間がない。それに浄化の魔法はあんた得意だろ？」

その指摘にクリスは押し黙った。
浄化の魔法は一般的に水系統の魔法を使う。

青の森の魔女エレオノーラが伝えた魔法の中には、さらに上位の光系統の魔法で浄化する技もあるという。

エレオノーラは５００年前の戦争後、魔法を理論的に体系化し、錬金術の基礎を築いた。
火の魔法、土の魔法、風の魔法、水の魔法。そして５００年以前には発見されていなかった光と闇の魔法。
この最後の２つは、前の４つの魔法よりも魔力を消費するが、効果も大きいとされている。
モナド国立魔術学校の魔法学科では、それらの系統化された魔法をもとに講義が行われており、最終的には卒業する時にわずかでもいいから光か闇の魔法を使えるようになることが目標とされていた。

クリスはまだ修行中で光系統の魔法は使えなかったが、水系統の魔法ならウンディーネの力を借りて人の数倍の威力で発言させることができる。

よく思い返せば、あの雨の日。
クリスが立て看板を仕舞うところにウンディーネは立ち会っていた。
気づかなかったとはいえ、おそらく横を通り過ぎただろうヴァンには水の精霊の契約者であることがバレている可能性が高い。
そのことに思い当たったクリスはため息をついた。
錬金術師になりたいのに、どんどんその道から遠ざかっているのは気のせいだろうか。

関わりたくない、とクリスは眉を寄せた。
人と関わってわずらわしい思いをしたくない。
人間関係で悩みたくない。
そしてなにより傷つけられたくない。

幼いころからともにいるウンディーネくらいしか気づいていないが、いつも周りに冷たい対応のクリスの裏側はとても人見知りで怯える子どものままの部分があった。
色よい返事がもらえそうにないことが伝わったのか、目の前のヴァンは困ったように眉を下げた。
そうしているとやっぱり凄腕の冒険者には見えない。
街の土木業にたずさわる男たちの方がまだ筋肉もついてたくましい印象を受ける。

そうしているうちにギルドでの結論が出たのか、上司のひとりが近づいてきた。
クリスは椅子から立ち上がって、その場を初老の上司に譲った。
上司の男は疲れたように椅子に座ると、クリスに目礼したあとヴァンに話しかける。
「待たせたね、ヴァン君。こちらの結論としては魔法使いか錬金術師の支援を追加することに異論はない。その分の追加料金は本来依頼人が負担するものだが、依頼人の安否がわからないので、一時的にギルド負担に決まったよ」

ヴァンは無言でうなずいた。
むしろ依頼人が生きているとは思っていない様子だ。
「それで助っ人の件はどうなるんだ？俺としてはこの子に頼みたいんだけど」

ヴァンがクリスを指し示すと、上司は驚いた表情をした。
「この子はまだ学生だよ？・・・もしや契約精霊が顕現しているところを？」
「ああ、見たよ」

やはり見られていたらしい。
クリスは上司のわきに控えながら、そっと落ち込んだ。
湖面のように青く透き通った瞳が、彼女の内心を表して曇った。
もっと慎重に行動すべきだったかと思ったが、誰がこのようなことを想定できるだろうか。
そもそも皇都で暮らす人間で、一定以上魔法に関わる者ならクリスとウンディーネのことを知っていてもおかしくない。
現にギルドの採用試験に現れたクリスを見た試験官は、すぐに彼女が水の大精霊の契約者クリス＝ルクスだと気づいていた。
皇都に根をおろしていないヴァンでも、遠からずクリスの存在を知ったことだろう。

上司はしめつらしい表情で悩んでいたが、クリスに問いかけた。
「水の魔法を使うだけなら、君ほどの適任者はいないだろうね。ギルドとして答えるなら是非受けてほしい。だけど一人の上司として、大人としては安全なところで守られるべきの、まだ学生の君に危険なことはしてほしくない」
「・・・はい」
「ご家族とよく相談してみてくれ。・・・ただ、ことはひとつの村が魔物に蹂躙された極めて危険な状態だ。国に判断をあおぐことになるだろう。もし国もギルドと同様に君に応援を求めたときは・・・」

そのあとの言葉は口にしなかったが、クリスはこの初老の男が言いたいことを正確に理解した。
国家の命令となれば、ほとんど平民と変わらない生活をする末端とはいえ、貴族のクリスに否は唱えられない。
国家につらなるものは民を守る義務と、国を栄えさせる役目を背負う。

クレセント王国がモナド皇国になった当時から「高貴なるものの責務」として、貴族の家に生まれたものは、その責任の重さを教え諭されてきた。
二度とこの国に戦乱を起こさせないために、民を守る国家と貴族の模範は守られねばならない。

クリスは内心の苦い感情を押し殺してお辞儀した。
「心得ております。明日の朝までに家族の説得は済ませましょう。おそらく国の判断はギルドと大差ないでしょうから」
「すまない」
「お気になさらず。当然の義務です」

ヴァンはクリスと上司のやり取りを見ながら、驚きに目を見開いていた。
「あんたさっきと全然言うこと違うな。てっきり断られるかと思ってたよ」
「断ることができない状況になったのです。私は貴族の娘ですから」

クリスが能面のように感情の見えない顔で淡々と言うと、ヴァンは納得したようにうなうずいた。
「ああ、「高貴なるものの使命」とか「責務」とか言われてるやつか。あんたが貴族とは思わなかったよ・・・いや、いい意味でだ。俺が知ってる貴族はもっと近寄りがたい雰囲気とかあって苦手なんだよ」
「私の家は貴族と言っても、ギルドの受付をするほど資金繰りに困るような財政状態ですからね。普段の生活は一般の民と変わりません」
「・・・そ、そうなんだ」

答えに詰まった様子のヴァンに、クリスは内心苦笑した。
Aランクの実力を持つヴァンを雇うような金銭的余力のある裕福な貴族を、普通の貴族だと思っていたのだろうことが透けて見える。
実家の家計が火の車です、と堂々と言うような貴族には会ったことがないのだろう。
ばつが悪そうに頬をかく彼は年齢よりも幼く見えた。

夜のうちに王宮から使者が送られてきた。
ご丁寧にも口頭でなく、クレナダ村へAランク冒険者ヴァンとともに向かい事件を解決に導くように通達書を持参して。

翌朝、クリスは父親と母親に見送られてギルドへの道を歩いていた。
彼女のほかに兄妹はなく、一人娘が危険な場所へ赴くことを止められないことに両親はひどく罪悪感を持ったらしい。
見送る表情は苦悶に満ちていた。
彼らに精一杯の笑顔で手を振ることだけが、クリスに出来たことだった。

クリスは旅のあいだ動きやすいように薄紫の髪を耳の両サイドで結い、白の丈夫な革のブーツを履いている。
服は藍色を基本に、淡い水色で彩った丈の短いワンピースだ。
戦いには向かない衣装だが、右ふとももに刻印されているウンディーネの契約の紋を出せるようにしておかないと、いざというときすぐに彼女を呼び出せないかもしれなかった。
服で紋が覆われていても召喚可能だが、直接触れて実行したほうがこめる魔力も少なく、かかる時間も短いので便利なのだ。
手には母が用意したお弁当と、水。それから少しのお金が入った袋。

遠出の旅行くらいしか経験したことのないクリスは、なにが必要なのか判断がつかなかったので、ほかに必要なものがあれば道中買い揃えようと考えた。

ギルド本部の入口をくぐると、すでにヴァンが待っていた。
「おはようございます、ヴァンさん」
「おはようさん」

挨拶を交わしたヴァンはクリスを上から下まで眺めてきた。
クリスはやはりこの服は場違いなのだと、居心地の悪い思いで視線を受け止める。
「すみません。旅の服は手持ちになかったのです」
「そっか・・・そうだよね。冒険者じゃあるまいし。ま、あんたは後ろで援護してくれれば充分だから」
「はい。仕事は果たします」

気楽に言うヴァンに対して、クリスは生真面目な返答を返した。
そこに朝の受付の業務についていたマリーと、上司たちがふたりに気づいて近づいてきた。
マリーは心配げな表情でクリスの手を両手で包み込んだ。
「無理はしないようにね。ヴァンさんの言うことを聞いて、無事に帰ってきてね」
「ありがとうございます、マリーさん」

初老の上司も心配そうに顔をしかめている。
「おはよう、ふたりとも。気をつけて行っておいで。クリスの学校にはギルドから連絡をまわしておくから、そちらは任せなさい」

クリスはうなずいて礼を返した。ヴァンは背に負った自身の荷物を背負い直すと、クリスのほうを向いて笑った。

「じゃ、行くか！」

クレナダの死霊　？

皇都を出て街道を歩いているとき、ふとヴァンが口を開いた。
「そういえば俺たちお互いにまだ自己紹介もしてないんじゃない？」
「・・・そういえばそうですね」

クリスはヴァンの名前をギルドの受付として知っていたが、ヴァンはクリスのことを知らないだろう。
これから一時的とはいえパーティを組むというのに、初歩的なことを抜かしていたクリスは急いで名乗った。
「申し訳ありません。私はルクス男爵家の娘、クリス＝ルクスです。すでにご覧になったようですが、水の精霊ウンディーネの契約者を務めています」
「俺は知ってのとおりヴァンだ。樹海出身のＡランク冒険者してる」
「樹海！？」

クリスは驚愕のあまり口を開けたまま固まった。
樹海はモナド帝国やほかの国が根ざす、この大陸の北部に広がる森のことである。
魔物の巣窟として有名で、あまりの瘴気の濃さに近くに人間の村は存在しない。
「ああ。子どものころに、魔物退治に樹海に来た冒険者に拾われたんだよ」

言外に捨て子だったのだと言われて、クリスは追及の言葉を飲みこんだ。
魔物の跋扈する樹海に子どもを捨てるということは、実質死んでくれと願われているに等しい。
ヴァンは気にしたふうもなく、からからと笑って続きを口にした。

「じゃあ臨時パーティよろしく。敬語とかなしで頼むよ。かたくるしいのは背がかゆくなりそうだ。ついでに俺の不作法も許してくれるとうれしい」

ヴァンが笑っているので、クリスもこれ以上この話題は引きずるまいと決めた。

「わかったわ、ヴァン。これでいい？」

「ああ。クレナダ村まではこの調子で歩いて・・・そうだな。1日半くらいか」

「もっと早く歩けるわ」

「いや、普段の歩く速さをたもってほしい。体力勝負だからね。向かいながらどんな魔法を使えるかも聞いておきたいし」

クリスはヴァンの言葉に魔術学校で習った魔法を思い出して、ひとつひとつ説明していった。もちろん水系統の魔法を中心に話す。そうしているうちに日が暮れ、その日は開けた平原で野宿することになった。

昼はクリスの持参したお弁当で腹をふくらませたが、夜の分はヴァンが保存食を調理したものを食べた。

乾燥した肉を戻したスープは臭みもなくさっぱりとしていて、硬めのパンは塩味がきいて美味しい。保存食の質がいいのかヴァンの料理の腕がいいのかわからなかったが、野宿と聞いて質素で大味な食事を想像していたクリスは意外な心持ちで夕食を済ませた。

食べ終わった後、クリスはすっかり暗くなった周囲を見回した。遮るものが低木くらいしか見当たらない平原は、満天の夜空の素晴らしさを差し引いても恐ろしかった。

「ヴァン、どこか隠れられるようなものがあるところに移動しなくていいの？」

ヴァンはたき火の炎を枝でかきまわして調節しながら、
「ん？ああ、そっちのが急に襲われたとき対応しにくいんだよね。俺たちが隠れられるってことは、敵も隠れられるってこと。それなら見える範囲を広く持ったほうがいい」
と言った。クリスは納得したものの、少しだけ火の側に近づく。明るい場所の方がなんだか安心できる気がしたのだ。

ヴァンの茶色の髪が炎に照らされて金に光って見えた。
それ以外は闇に沈むように彼の印象を薄くしている。衣装が全体的に茶色で、使われている装飾具も黒なので余計に目立たない。なるほど、これが冒険者の服装なのかとクリスは感心した。
皮のジャケットも丈夫そうだし、ズボンの縫製もきちんとしていて長持ちしそうだ。
腰にベルトで固定した小さな黒いカバンには、ほころびひとつ見当たらない。

まじまじと見つめる視線に気づいたのか、ヴァンがその濃い青の瞳でクリスをいぶかしげに見てきた。
クリスはなんでもないと示すために首を振った。

次の日の昼過ぎ。
太陽が真上から少し傾いたあたりで、ようやくクレナダ村が見えてきた。
ヴァンがクリスの前に出て、指示を出す。
「俺が死霊を足止めしておくから、あんたは浄化に専念して。あと絶対に前には出ないこと。させない気持ちでいるけど、もし敵に近寄られたら結界で防御に専念してね」

「ええ、分はわきまえてるわ。・・・ウンディーネ、来て」

静かに答えて、クリスはウンディーネを召喚した。
右太ももの紋に手を置いて呼びかけると、すぐに呼応して輝き、水の精霊が顕現する。
ヴァンは一度見たとはいえ、上位精霊が珍しいのかウンディーネの姿をじっと見ている。

ウンディーネは泳ぐように空中で一回転すると、クリスの前に浮かんだ。
「ときどき見てたから～、事情は知ってるわ～。とにかく浄化すればいいのね～？」

優美な水の権化の外見と、おっとりとした口調の落差にヴァンがのけぞった。
「俺、しゃべるくらい力の強い精霊は初めて見たけど・・・」
「言わないで。ウンディーネが例外なのよ、きっと」
「・・・そっか」

ほかの上位精霊に会ったことはないクリスだが、夢を見るくらいは自由だろうとまだ戸惑っているヴァンを黙殺した。

クリスの緊張を適度にほぐすためか、ヴァンはときおり軽口をたたきながら村の入り口まですすんだ。
おかげでクリスは妙に気負うことなく毅然と立っていられる。
感謝しつつ、こちらを見るヴァンにうなずき返した。

そしてヴァンは村に一歩入った瞬間、爆発的な速さで駆け出した。
走りながら剣を振りぬき、手前にいた半透明の死霊を数体まとめて切り伏せる。

これだけでは核を失っていない死霊はいずれまた復活してしまうので、クリスはすぐに浄化の魔法を発動した。
手のひらを死霊たちに向けて、強く水の流れをイメージする。
伝説の青の森の魔女はそれだけで魔法を使いこなしたらしいが、クリスはイメージを言葉にしてより強く念じなければ魔法を発現させることは難しい。
魔法使いとしても錬金術師としても尊敬する彼女のような力があれば、と悔しく思いながら口を開いた。
「清らかな恵み。母なる海。慈しみの雨。・・・お願い鎮まって」

クリスの手のひらの前に水色の魔法陣が展開された。
ウンディーネがその魔法陣を指でちょんとつつくと、陣がゆっくりと回転しながら複数に分裂した。
ひとつひとつが分かれ、それぞれ死霊の真上に飛んでいく。
倒れたままの死霊は、上から降りてくる浄化の魔法を避けることはできない。
陣に包まれた死霊は光の粒子となって消滅した。

クリスとウンディーネの浄化作業を見て取ると、ヴァンがクリスを呼び寄せた。
「お見事！」
「ううん。まだ全部終わってないわ」

クリスは首を振って村の奥を見た。
ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、死霊たちが集まってきている。
そのうちの一体でも襲われたらクリスは死ぬだろう。ヴァンは万が一のときは結界を張れと言っていたが、クリスは自分がとっさに魔法を発動させられるとは考えていなかった。
学校で模擬戦をしたことはあっても、実践は先ほどのが初めてだ。
ぞっとしながら両腕で自分自身を抱きしめる。

さっきは浄化に集中していたから気づかなかったが、死霊の死んだ瞬間を模した姿かたちもおぞましい。
半透明でもはっきり見える傷口から目をそらしたくなった。
不意に日がかげったので見上げると、ヴァンが背を向けて前に立っていた。
「さっきみたいに一体一体やってくれたらいいから」
ヴァンの影にかくまわれたクリスはほっと息をついた。
「ありがとう。少しずつ進みましょう」
「そうだな」
ふたりはゆっくりと慎重に村の中心部へ進んでいった。

空にある2つの太陽が傾き、夕焼けにそまった村で動く者はいない。
これまでのあいだにクリスとヴァンは、村にいたほとんどの死霊を浄化し終わっていた。
あとはクレナダ村が瘴気に侵された原因を探るだけである。
魔力を消費して少し息をはずませているクリスに対して、ヴァンは平然と立っていた。
クリスは呼吸をととのえながらヴァンに近寄った。
「このあとはどうするの？ひとつひとつの家を調べるのかしら」
「それだと時間かかりすぎるよ。この村で夜を明かす気にはなれないし・・・まだ気になることがある」
「気になること？」
空中を遊泳していたウンディーネも側に呼び寄せながら、クリスは首をかしげた。

ヴァンは考え込むようにあごに手を当ててうつむく。
「退治した死霊は村人のような普通の人たちばっかりだった・・・。じゃ、先にここに派遣されたはずの冒険者はどこいったんだろうね」
「・・・あ」

浄化で手いっぱいだったクリスと違って、ヴァンは死霊の様子も観察していたらしい。
それなのに怪我らしい怪我もせず、体力面でも余裕そうだ。
ヴァンに頼もしさを感じつつ、クリスは派遣された冒険者の数と人相を思い浮かべた。
「たしか最初に派遣されたのはCランクの冒険者が1名。次にBランクの冒険者が4名よ。Bランクの冒険者のうち1名は遺体で戻ったから、合計4名の行方不明者ね」
「いいや、先に様子見にきたときに村の外で冒険者風の死体を見かけたよ」
「じゃあ3名の行方不明者・・・たぶん死霊がまだいる？」
「・・・かもしれない。俺が見つけたみたいに、村の外でころがってる可能性もあるけど、最大3人の死霊がまだ潜伏してると考えたほうがいいね」

死霊は知能が低く、人間の気配がないときは襲うそぶりもない。たださまよって瘴気をまき散らしながら仲間を増やしていく。
潜伏するとか不意打ちをつくというような思考はできないとされていた。
そのはずなのに見渡す限り、3人の死霊が動いている影もなければ音もしない。

ヴァンが剣の柄を握りなおした。
「考えられるのは、出られない状況にいる可能性。その空間でうろうろしてるなら、ここにはいないことも説明がつくし」

「どこかの家にいるってこと？」
「それは考えにくい。家の中からなら窓からでも出られるからね。・・・だけど地下があるなら別かな」

クリスははっとして広場の少し奥にある建物を見た。
村の中心部から少し外れたところに建つその建物は、元は村長の家だったのか他の家々よりも少し大きい。
地下室を作れるくらいには資金があり、敷地も広そうだ。
ヴァンも同じ結論に達したのか、そちらを見た。
「じゃ、最後の退治に行こうか」

クレナダの死霊　？

ヴァンは建物の入り口の扉を堂々と開けた。
この物音で残っている死霊が出てくればよし。探す手間がはぶけるというものだ。
しかし玄関ホールにしんと静まり返って、何かが出てくる気配もない。
「ヴァン・・・はずれかしら？」
「ちょっと待って」

ヴァンは床にかがむと、丹念に床板を調べ始めた。
クリスは何をしているかわからなかったが、冒険者としてのヴァンの強さを見て実感しているので黙って見守ることにする。
やがてヴァンは立ち上がって、建物の奥を指さした。
「床につもったほこりの上に、何人かの足あとが残っているよ。上の階には続いてないみたいだから、奥へ進んでみようか」

クリスはウンディーネと浄化の魔法陣を作り出して、目の前に展開させる。
いつでも反応できるように気を引き締めながらうなずいた。

しばらく廊下を進むと厨房と思われる場所に出た。
鍋や包丁などが使い手のないまま放置されている。
物悲しい気分になりながらクリスは厨房内を見渡した。視界の端でウンディーネは退屈そうに水の玉を出して遊んでいるのを見つける。
「ウンディーネ、遊ばないで」
「だって～、やることないんだもの～」

「浄化の仕事があるでしょ」
「もう魔法陣の強化ならしたわ～」
「そうじゃなくて緊張感を持ってって・・・」

「クリス」
ウンディーネと言い合っていたクリスは、急にヴァンに呼ばれてびくりと身を震わせた。
注意力が散漫になっていたことに気づいて頭を振って気持ちを切り替える。
この精霊が自分のペースでしか動かないことは、今更どうしようもない。
「ごめんなさい。なにか見つけた？」
「うん。地下貯蔵庫だと思うけど、あそこの床に取っ手がついてる」
ヴァンの見る方向に顔を向けると、石床の一部が四角く切り取られ、木製の板がはめこまれている。取っ手を引っ張って上に引き上げることで地下へ進めるようだ。
「小さいわね。ひとり降りるだけの幅しかなさそう」
「念のため浄化の魔法陣を板の上に敷いてほしい。開けた瞬間に襲われたくないからね」
「わかった」

クリスは魔法陣を2つに分割して、一方を木の板の上ぎりぎりに浮かせた。
抜き身の剣を携えたヴァンが慎重に取っ手を持ち上げる。
板が完全に持ち上げられた瞬間、下から真っ黒ななにかが連続して飛び上がって来た。
「・・・っ！？」
クリスは驚いて後ずさった。

その拍子に床の凹凸につまずいて尻餅をつく。
ヴァンも剣を構えて飛び下がっていた。
しかし飛び出してきたものたちは浄化の魔法陣に触れた瞬間、粒子となって霧散していく。
「当たりみたいだね」

ヴァンは片手で油断なく剣を構えながら、もう一方の手をクリスに差し出した。
「あ、ありがとう・・・。死霊だったの？」

ヴァンの手を借りて立ち上がったクリスは恐る恐る彼の背から顔だけ出して、地下へと開いた穴を見る。
「そうだね。よく見えなかったならよかった。けっこうエグい死に方したみたいで、そのまま夢に出てきそうだよ」
「・・・そう」

見なくてよかったと、クリスは心から思った。
ヴァンは穴を覗き込みながら、ほかに飛び出してくるものがないのを確認すると言った。
「地下を調べてくるから、ここで待ってて」
「ひとりで行くの？」
「もう魔物の気配はないけど、罠の可能性があるから。ここに最後の冒険者たちが閉じ込められていたのも、その罠のせいかもしれない」

そのときウンディーネが水球で遊ぶのをやめて口を開いた。
「人間の罠はわからないけど～、そこから嫌な気配がするわ～。魔法の力もほんの少し～。あとはよくわからないわ～」
「呪いの魔法かな？」
「人間の使う魔法の種類なんて～、どんどん新しくなるんだもの～。

知らないわ～。でも～、とにかく嫌なの～」

クリスは眉をしかめた。
瘴気をまいて人を死霊にする呪いの魔法が使われている可能性が高いということは、村の報告がヴァンからギルドへもたらされたときに知っていた。
その可能性がさらに高まったなら、ヴァンを単独で地下に行かせるのは危険すぎる。
「呪いの魔法があるかもしれないなら、私が行って浄化したほうがいいわ」
「罠はどうする気？」
「それは・・・」

手詰まりになったふたりは黙り込んで顔を見合わせた。
時間だけがすぎていく。
窓から差し込んでいた夕日は落ち切って、すでに宵闇が支配する時間帯に入っている。
一度引き上げたほうが・・・とクリスが提案しかけたとき、建物の入り口から石床をかろやかに歩く足音が聞こえてきた。
「クリス、後ろに」

ヴァンが厨房の入り口に向って剣を構えた。
音をたてないようにしながら、クリスはヴァンの背後にまわって壁を背に身を小さくした。ウンディーネは天井付近の空中にとどまって、下を見下ろしている。

そして厨房の唯一の入り口に、ひょっこりとフードを目深にかぶった男が姿を現した。
ヴァンは無言で男に剣を突き突けた。
しかし男は全く動じることなく首をかたむける。

「アレ？先客が来てたのカナ？」

ヴァンは剣先を男ののど元まで持っていった。低い声で誰何する。

「誰だ？」

「ナマエ？ナマエ？名無しダヨ」

「馬鹿にしてるの？」

「名無しダヨ」

フードの男はからかうように同じ言葉を繰り返した。

男の発音が妙に耳触りで気分が悪くなってきたクリスは、そっと胸元を抑えた。

何ひとつ前触れはなかった。

気づけばクリスは痛みを訴える体を床に横たえていた。

何が起こったのかと目を開くと、すぐそばで壁に背を預けて座り込んでいるヴァンがうめき声をあげている。

「ヴァン！」

跳ね起きようとしたが、からだに激痛が走って再び床に沈んだ。

側にいたらしいウンディーネがそっとクリスの頭を撫でた。

「クリスちゃ～ん、治癒の魔法を使って～。増幅させて動けるように治すから～」

クリスはすぐにうなずいて脳裏に水のイメージを思い浮かべる。

声を出すだけで痛むので、とぎれながちな呪文をなんとか言葉にした。

「清らかな・・・恵み。母・・・なる海。慈しみの雨・・・。癒し・・・の・・・力」

ウンディーネの増幅を受けた治癒の魔法は、クリスとヴァンの体の表面をおおって淡く輝いた。
輝きが鎮まると、立ち上がるクリスより先にヴァンが身を起こした。その勢いのままクリスを強引に引き寄せて、自身の背後にかばう位置に持っていく。
「わっ！・・・きゃっ！？」

ただ立ち上がろうとした瞬間だったので、クリスはヴァンの背を見ながらもう一度尻餅をつく羽目になった。
「なにが起こったんだ・・・」
「わ、わからないわ」
「あいつもいない」

そう言って、ヴァンは床に落ちていた自分の剣を慎重に取り寄せると、片膝をついた状態で周囲を警戒する。
クリスも辺りを見回しながらウンディーネに問いかけた。
「ねえ、ウンディーネ。何があったの？あの男の人は？」
「え～と～。すごく強い風の魔法が～、ど～んってクリスちゃんたちにぶつかったの～。あの人間は～、嫌な気配のするものを持って～、出ていったわ～。直撃しなかった私にも～、衝撃が来るくらい～、すごかったの～」
「え・・・」

ヴァンはウンディーネの言葉にぐっと目元に力を入れて、顔をゆがめた。
「くそっ。手がかりを逃がすなんて、なんてざまだよ！」

クリスもここまで来て犯人らしき男を逃したことに衝撃を受けたが、それよりも別のことに驚愕していた。

冒険者最高峰の実力を持つヴァンを、ただの魔法の一撃が気絶させたことだ。

空気の塊を圧縮して放つ風系統の攻撃魔法を、無詠唱で。
なんの気配も感じさせずに強力に練り上げ。
完全に不意をつく形でＡランクの冒険者を吹き飛ばす。
どれほどの実力者なのかと、生きているのが不思議に思えるくらいだ。

身の内から震えが走って立ち上がる気力もないまま、クリスは冷たい床に座り込んでいた。

クレナダの死霊　？

あのあと、クリスとヴァンはクレナダ村の周囲の平原を拠点にして、泊まり込みで様子を見た。
逃げた男が戻ってくる可能性は低かったが、念には念を入れることにしたのである。
村の中で様子を見る案も出たが、新たな死霊が生み出されるかもしれない場所にはとどまれなかった。

フードの男が何者なのか。
ウンディーネの言う嫌な気配のするものが死霊を生み出していたのか。

結局新しく死霊が出てくることはなく。
なにひとつ判明しないまま2日がすぎて、忸怩（じくじ）たる思いを抱えたふたりは皇都に帰還した。

皇都のギルド本部に戻ると、マリーが駆け寄ってきてクリスを抱きしめた。
「ああ、よかったクリスちゃん！無事でよかった！」
「はい・・・マリーさん」
「先に報告にいってるよ」

ぎゅうぎゅう抱きしめられているクリスを横目に、ヴァンはギルドの奥へ進んでいった。
その表情は暗い。
クリスも帰ってきた喜びはあっても、釈然としない気持ちを抱えて

いた。

そして今。

クリスとヴァンの報告を受けたギルド職員たちは、それぞれに動揺の表情を浮かべている。

口々に思いつくままの推論を交わす。

「Aランク冒険者が・・・」

「まさかSランクがあらわれたのか？」

「いや、その前にそいつの目的はなんだ」

「国に報告しなければ」

「待て。情報を整理してからだ」

「そんな時間があるのか？犯人はまだ捕まっていないんだぞ」

まとまらない話にヴァンが口をはさんだ。

「ひとまずはっきりしているのは、クレナダ村の依頼は達成ってこと。もちろん犯人はつかまっていないから、言いたいことはあるだろうけどね。依頼内容は、魔物の調査および村民と冒険者の安否確認だったんだから」

魔物はいた。そしてその死霊は退治された。

村民と冒険者は全滅。

たしかに依頼は達成されているが、犯人らしき男を取り逃した問題は大きい。

白髪で豊かな髭にうもれるような小柄な老人が確認するように言った。

「たしかにのう。このとおり依頼は達成されておるし、依頼金は払わねばのう。だが、坊主よ。おそらく犯人の追跡と、捕獲の依頼が国から出されるじゃろうのう」

「だろうね。俺が受けるよ」

「うむ」

クリスはそのやり取りをただ黙って見守っていた。
ぎゅっとスカートのすそを握って、うつむくことだけは耐えている。
クリスの役割はただの助っ人だから、ギルドの方針にもヴァンの今後にも関われない。

関われない？

クリスは頭で考えたことに自分自身で驚いた。
私は人間関係は面倒だと感じていて人と距離を置いていたはずなのに、すすんで関わりたいと感じるなんて、と。

ひとり悩むクリスを置いて、会議は終了した。
「おつかれさん」と声をかけてくるヴァンに生返事を返しながら、クリスはぼんやりと彼の顔を見つめた。

世界中に点在するギルド支部と、皇都のギルド本部を運営しているのはモナド皇国である。
その中でも直接関わっているのは運営資金を出す財務大臣と、宰相。そして皇帝だ。
彼らは城の一室に集まって、膝を突き合わせていた。
「ゆゆしき事態だな」
「冒険者ギルドの信頼が揺らぎかねません。Ａランク冒険者の存在は大きいのですよ」
「犯人を捜すのは当然としても、手段が限られますね。実質Ａランクのヴァンしか追跡できません。ほかの冒険者では情報も得られず死ぬでしょう」

宰相の発言に皇帝はぽんと膝を打った。
「それだ」
「陛下？」
「余は誰の血をひいておる？」
「それはクレセント公爵家と青の森の・・・あ」

宰相と財務大臣も気づいたのか、ぱっと表情を明るくした。
「あの方なら！」
「さっそく伝書鳥を飛ばしましょう」
「一番早いやつで頼む」

返答は半日とかからず届いた。
伝書鳥ではなく、魔女の魔法によって手紙だけが皇帝の前に正確に転移してきたのだ。
すでに魔女が表舞台から引いて５００年。
子孫である皇帝でさえ直接青の森の魔女とあったことはないが、生まれたときに言祝ぎの花を贈られたことを思い出した。
子が産まれて数時間後の早業に、いったいどんな方法で子孫の誕生を知ったのかと、物心ついたあとで戦々恐々とした覚えがある。
「相変わらず正確無比で、規格外な魔法だな」

皇帝は苦笑しながら手紙の封を切った。
封蝋はクレセント公爵のもので、現在この大陸で使うことが許されているのはクレセント公爵本人と妻の魔女だけだ。
「陛下、あの方はなんと？」
「まあ待て。・・・読むぞ」

――――拝啓。めんどくさいから全部略。
うちの子が助けを求めてくるなんて何十年ぶりかしら？月日がたつのは早いわねぇ。

クレナダのことは残念だけど、廃村にしたほうがいいわ。原因がはっきりしてないのに、人を住まわせちゃダメよぉ。
あと私を頼ってくれるのは嬉しいけど、モナド皇帝の地位とかメンツとか、ほらいろいろあるじゃない。
あんまりアテにしないでねぇ。でもちょっとだけなら力を貸すわ。
国境沿いに硬い結界を張るわねぇ。人をぜーったい通さないＡＴフィールド！
犯人を絶対にモナドから逃がさないわ。
うちの国で好き勝手するなんて、ちゃーんとお仕置きしておいてね。
ってことだから、交易も一時停止することになることだけ注意して。
がんば！

――――エレオノーラより

「・・・・・・」
「陛下、えいてぃふぃーるどとは何でしょうか」
「知らん」
「陛下、我が国の外交は止まりますな」
「そうだな」
「陛下、諸外国に何と説明しましょうか」
「・・・うむ」
「陛下・・・」

皇帝は手紙を持ったまま椅子に沈没する。
青の森の魔女エレオノーラ。
さまざまな伝説を残した彼女の破天荒さは、絵本作家の脚色でも歴史家の過大評価でもなかったのだと、しみじみ実感することになった。

数日後、皇都のギルド本部から各地のギルドに向けて通達がなされた。
フードをかぶった風を操る魔法使いの目撃情報の収集。
国境の封鎖。
そして彼の追跡はＡランク冒険者ヴァンに一任することを。

クリスはマリーと交代した受付に座って次々と業務を片付けながら、その中身は別のことを考えていた。
家に戻ってからも、学校で授業を受けながらも、ずっと頭の中は同じ思考を繰り返す。
このまま何もなかったことにして、日常に戻っていいのだろうか。
初めて人と関わりたいと思ったのを無駄にしていいのか。
「私は・・・このままでいいのかしら」

無意識に口からこぼれ落ちた言葉を拾った目の前の冒険者が怪訝そうな顔をした。
「嬢ちゃん、どうしたよ。書類に不備でもあったかい？」
「あ、いいえ、失礼しました。確認とれましたので、どうぞあちらで依頼金をお受け取りください」
「まいどあり！」

冒険者の男は機嫌よさそうに去って行った。
そこで一通り並んでいた冒険者をさばけたので、クリスは立ち上がって伸びをする。
そのとき建物の入り口をくぐった茶髪の青年が目に入る。
ヴァンはまっすぐにクリスに向って歩いてきた。
「やあ、クリス」
「ヴァン？どうしたの」

ちょうど彼に関することで悩んでいたので、クリスは少し鼓動が早くなった胸を抑えた。
「休憩はいつ？」
「いつとは決まってないけど、今ちょうど手があいたところよ」
「だったら、少し時間を取ってほしい」

クリスは何の用事かと不思議に思いながら、ヴァンに近づいた。
ヴァンは声を潜めて、
「身の回りに注意してくれ」

と言った。突然の不穏な言葉にクリスは驚いて、彼の顔を見つめた。
「どういうこと？」
「あの犯人らしいフードの男。あいつに顔を見られたのは俺だけじゃないってことだよ。国とギルドから正式に指名手配されたんだ。逃げるために目撃者を消そうと考えるかもしれない」

そのことに初めて思い至ったクリスは口元を手で覆った。
もしあの男が攻撃してきたら、クリスなど一瞬で死んでしまう。
どうしよう、とクリスが考えていると、ヴァンが懐から手のひらに収まるほど小さな銅製の彫像を取り出した。
「前に錬金術師の依頼を受けたときにもらったものなんだ。一度だけ攻撃されたとき、自動的に結界を張ってくれるらしい」
そのまんま身代わりの彫像とか言ってたな、と話しながら、彼はクリスに手渡した。

「いいの？」
「構わないよ。今まで持ち歩きもしなかった品だ」
一時的にパーティを組んだだけの女など見捨ててもいいはずなのに。
ヴァンの気遣いにクリスは、このままでいいはずはないと思いを固めた。

第二章　主な登場人物（前書き）

※二章ネタバレあり

第二章　主な登場人物

～登場人物紹介～

・クリス＝ルクス　１６歳　女
男爵令嬢。でも土地があるだけ。お金はない！学費はギルド受付のバイトで稼いでます。
水の大精霊ウンディーネとの契約者。

・ヴァーヴァティ　１９歳　男
樹海で冒険者に拾われ、育てられた捨て子。
冒険者ギルドで唯一のＡランク。本名は長いので「ヴァン」と略している。
現在、モナド国家とギルドの依頼でクレナダ村を廃村に追い込んだフードの男を追跡している。

・ウンディーネ　年齢不詳　女
水系統の精霊の中で一番力を持つ精霊。
生まれたばかりのクリスの魂が水色だったので、水を司る存在として好感を持つ。
そのままそばで成長を見守るために無断で一方的に契約。

・名無し　年齢不詳　男
最近各地で起こる魔物や精霊の暴走事件にかかわっている青年。
とても強い魔法使い。
話し方が独特。

・エレオノーラ　年齢（三十路＋５００年程度）　女

かつてのクレセント王国の公爵夫人。
蒼の森の魔女と呼ばれ、絵本などにも登場する有名人。

・マリー　三十路～四十路前半　女
冒険者ギルドで昼番をしている女性。
クリスと同じ年頃の娘がいる。

・すらいむじゅうさんごう　年齢不詳　性別不明
ぷにっとした丸っこい球体の持ち主。モナド国立魔術学校の妖精。
複数集まると合体してきんぐすらいむになれるという噂。

・ふぇんりる　年齢不詳　性別不明
モナド国立魔術学校の妖精その2。巨大な狼のような体をしている。
瘴気に侵されて魔物化したらしい。

・皇帝、宰相、財務大臣
皇国の頭脳3人トリオ。
皇帝の一族は代々、祖先のエレオノーラの黒髪とキールの緑の目を
持って生まれてくる。
宰相と財務大臣は皇帝の乳兄弟で幼馴染。

魔術学校の妖精　？

クレナダ村の事件から数週間後。
モナド皇国内は特に混乱もなく、人々は落ち着いていた。

当初はさすがに国中で混乱が巻き起こった。
特に諸外国と取引をしている商人たちを中心に役所に陳情書が次々と届けられたが、一定の救済策を国が施行したことで鎮まったのだ。
商人たちには国境に敷かれた結界の影響で交易が断絶された分、申請すれば生じた儲けへの被害救済金が交付された。
クレナダ村を廃村に追い込んだ犯人に怯える人々には、今まで以上に騎士団が街や村を見回って治安維持に努めるとともに、犯罪をおかした人間には現行よりも厳しい罰則を与えるようにした。

ほかにもギルドが引退した冒険者たちに掛け合って有志の自警団を作り、騎士団の目の届かないスラムや郊外に居を構える人々の救済を始めた。
それらの積み重ねによって、モナドの人々はようやく落ち着きを取り戻したのだ。

クリスはモナド国立魔術学校の魔法学科の授業を終えると、錬金術学科の補習にいつものように潜り込んでいた。
横に置いているカバンの中には、いつ襲われても対処できるようにヴァンから貰った身代わりの彫像が入っている。
日常と非日常。
少しの緊張を保ったまま、クリスは日々を過ごしていた。

クリスは備品の錬成釜に黒板に書かれたレシピを何度も確認しながら材料を投入した。
基本的に自由出席の補習なので、こうしてクリスが紛れ込んでいても講師が気づくことはないし、備品が足りなくなることもない。
こうして授業を増やす分には制限がかかることはない魔術学校だが、逆に欠席には厳しかった。
自由出席ではない授業では必ず点呼を取り、無断で欠席した生徒は各分野の試験から一定の点数を引かれる。もちろん及第点以下なら追試だ。
追試も重なりすぎると落第になりかねない。
だからクリスは錬金術学科の授業だけを受けたくても、入ったのが魔法学科である以上、その授業をさぼれなかった。

錬成釜から取り出したものを布で包んで加工していく。
今回の補習内容は小規模爆弾“フラム”の錬成である。
あの青の森の魔女が伝えた技のひとつとされていて、護身用に持ち歩く生徒もいた。
魔法だと初級の火の魔法程度の攻撃力しかない。

クリスは包み終えた“フラム”をそっと机の上に置いた。
講師が教室内を回ってひとつひとつ回収していく。
そして順番に出来の評価をされていった。
「右から順番に発表します。ひとつ目、A＋。よくできました。ふたつ目、C－。もう少し錬成時間をのばすとよいでしょう」

クリスは魔法の素質はあっても、あまり錬金術の素質はない。
理論上は完璧なレシピを参考に錬成しても、最後に流し込む魔力の量を調整するのが下手なのだ。
そしてついにクリスの“フラム”の評価が下された。
「三十五個目・・・E－。これでは爆発しません」

爆発しない爆弾など意味がない。
クリスはぺったりと机につっぷした。

補習後、ギルドの受付のアルバイトまでに少し時間があったクリスは図書館を訪れていた。
魔術学校の図書館は皇都で一番の蔵書量を誇る。
錬金術について書かれた書棚から、初級錬金術について書かれた本を抜き取る。
“フラム”の項目を開いて、先ほどの授業を思い出した。
「レシピはやっぱり間違いないわ。でもまた失敗してしまった」

クリスがため息をついていると、右太ももの紋が淡く光る。
空気がゆらめき、空中に水の貴婦人を生み出した。
この紋はウンディーネからの一方的な契約なので、契約者のクリスが呼ばずともウンディーネはいつでもクリスのもとに現れることができる。
急に現れるのもいつものことだった。
「どうしたの？」
「クリスちゃ～ん、ひまだわ～。ちょっとだけ遊んでくるわね～」
「え？」

クリスはぽかんと見つめている先で、ウンディーネは上空に舞い上がって溶け消えた。
自由気ままな精霊なので仕方ない、とクリスは頭を切り替えて手元の本に集中する。

日が傾き、窓から差し込む光が橙色に染まってきた。

クリスは文字の読みすぎで乾燥している目をまたたかせながら、ウンディーネを呼ぶ。
「ウンディーネ、そろそろギルドに行く時間よ」
呼ばなくても現れるウンディーネだが、こちらの呼びかけを拒否したことはない。
しかしどれだけ待ってみても、水の精霊は現れなかった。
「ウンディーネ・・・？」
いつも側にいた存在がいない不安定さに、クリスは悪寒を感じた。
じっと待っていられずにギルドに向って走り出す。
「そうよ。先にギルドに行って待ってるだけかもしれないじゃない」
かすかな希望をこめた祈りは届かなかった。
ギルドにウンディーネはおらず、翌朝になっても戻らなかったのだ。
契約精霊が不在でも紋はそのまま残っている。
消えていないということはウンディーネとのつながりも途絶えていないということだ。
翌日、ギルドの受付をこなしながらクリスはそのことに少し安心しながら、ひとりの青年を待っていた。
夜も更けてきたころ、ヴァンがギルドにやってきた。
彼はフードの男に関する目撃情報に新しいものがないか確認するため、毎日ギルドを訪れていた。
クリスは書類をまとめていた手を止めて、掲示板の前にいるヴァンに駆け寄る。
「ヴァン、ちょっといい？」

「クリス？」

クレナダ村の事件以降、クリスは人と距離を置いてしまう自分を変えようと決意したのはいいものの、まだ頼れるほど弱さを晒せる相手は限られていた。
ヴァンはあの同行していた間ずっとクリスを守ってくれたし、今も気にかけてくれているので他の人よりも話しやすい。
そう考えて、クリスはヴァンにウンディーネが行方不明になっていることを告げた。
「まだウンディーネは戻らないわ。ヴァンはいろいろなところを旅しているでしょう？精霊がこんなふうに契約者の呼び出しに応じない話とか、それを解決する方法を聞いたことはない？噂でもいいの」
ヴァンは腕を組んでしばらく唸っていたが、やがて首を振った。
「ごめん、心当たりはないよ」
「・・・そう」

魔法使いでも、精霊との契約者でもないヴァンだからダメで元々くらいの気持ちでいたクリスだが、やはり否の返事を聞くと気が沈んだ。
大きくため息をついて気持ちを切り替える。
ヴァンにはまだ訊かなければならないことがあった。
「ごめんなさい、もう少し自分で探してみるわ。・・・それで、あのフードの男は見つかったの？」

クリスにとってウンディーネの行方も心配だが、自身の命を狙っているかもしれない人物が国内にいることも心配だ。
ギルドに寄せられる情報はクリスも目を通しているが、フードのせいで人相がよくわからない人間を特定するのは困難だった。
目撃証言も錯綜している。

ヴァンはそれらの真偽を経験則からか、ある程度選別しながら追跡しているようだったので何か新しい情報をつかんでいるかもしれないと思った。
「あの馬鹿でかい結界のおかげか、まだ国内にはいるみたい。一度は潜伏先を突き止めたんだけど、すでにもぬけの殻だったね。今度はもっと見つかりにくいところに隠れていると思う」
「目星はついているの？」
「その目星をつけられるかと思って、今日の情報を聞きにきたとこ」
そう言ってヴァンは指名手配しているフードの男の情報だけを掲載した、別枠の掲示板をのぞきこむ。
何枚か掲示されている紙を手に取ったが、目を通したあと再び元に戻した。
「ああ、やっぱりなかったな。情報屋連中が血眼で探してるくらいだから、ギルドに寄せられる程度の目撃証言はあてにしてなかったけどさ」
「そうなの？」
「まあね。でもギルドに来た甲斐はあったよ。ひとついい情報を手に入れたかな」
いつそんな情報を聞いたのだろうか。
彼が本部の建物に入ってすぐに接触したクリスは首をかしげた。
「クリス、君が狙われているかもしれないって話はしたよね」
「覚えてるわ。身代わりの彫像もずっと持っているもの」
「そしてウンディーネは君の契約精霊だ。あの男が現れた現場にも具現化して、お互いに存在を知っている。俺は直接君に危害を加えてくるんじゃないかと予想してたんだけど、もしかしたらウンディーネのほうに何かしたのかもしれない」
クリスは天井を見上げて考えた。

言われてみれば、たしかにその可能性もあるかもしれない。しかしウンディーネに限っては考えにくかった。
精霊の生態は解明されていないが、知能を持ち話すことのできる存在は力も強いと伝えられている。
ウンディーネは自由気ままで緊張感のない性格だが、きちんと自我を持って発言するし、行動も自己決定する。
そのことからもかなり上位の精霊であることは間違いない。
クリスは視線をヴァンに戻した。
「可能性は低いと思うわ。精霊のウンディーネは水の化身。物理的な攻撃は効かないし、罠も関係ない。あのときみたいに魔法で攻撃されても避けられるくらい力も強いわ」

だからこそ呼び出しに応じない今の状況は異常だ。
あらためてクリスはそのことに戦慄した。
ヴァンは肩をすくめて掲示板にもたれかかった。
「まあ、それでもここにある情報よりは調べる価値があるね。一度いなくなった場所に行ってみるよ」
「図書館に？私も行くわ」

クリスはとっさにそう返していた。
「危険なのはわかってるんだよね？」
「そうね。でもウンディーネの契約者は私よ。私がいることでわかることもあるかもしれない。・・・それに、家族みたいなものなのよ。生まれたときからずっといっしょにいたんだから」

ヴァンはしばらく迷っていたようだが、やがて厳しい表情で言った。
「わかったよ。契約者が同行する利益は大きい。来てくれるなら助かるけど、俺の指示には従ってほしい」
「もちろんよ」

いなくなった水の精霊の顔を思い浮かべながら、クリスは大きくうなずいた。

魔術学校の妖精　？

モナド皇国の冒険者ギルド本部には、基本的に2人の受付が交代で勤務している。
正式に職員として雇われているマリーは、太陽が顔を出す時間から沈むまで。
まだ学生の身でアルバイトのクリスは、マリーと入れ替わりに月が空の真上に来るまでが業務時間となる。

クリスは仕事が終わって一度自宅に戻った後、そっと窓から裏道に脱出した。
貧乏ゆえにアルバイトで学費を稼ぐクリスだが、一応貴族の娘なので帰宅した後の外出を両親に認められていなかった。
そうでなくても年頃の娘が真夜中に帰ってくるので、そのあとに出かけるなど言語道断なのはわかる。
しかし今夜はそうも言っていられなかったクリスは、自宅なのに玄関ではなく窓から出ていく羽目になったのだった。

「おまたせ」
「時間的には大丈夫。いやでも提案しておいてなんだけど、よく抜け出せたね」
クリスはモナド国立魔術学校へ続く道の先にある広場でヴァンと合流した。
「私も昼間は授業を抜けられないから、仕方ないわ」
優秀な成績をおさめつづけなければ特待制度は受けられなくなってしまう。

学費の半額免除がかなりおいしい条件なので、クリスは授業を欠席して試験の点数を引かれることは避けたかった。
そしてヴァンはヴァンで、時間がたてばたつほどフードの男の行動を許すことになるため、情報をつかんだら真夜中でも動かざるを得なかった。

魔術学校の裏口まで歩いてきたふたりは、左右を見回して誰もいないことを確認した。
「それじゃ開けるわね」

クリスが懐から生徒手帳を取り出して裏口の門にかざすと、手帳に刻まれた生徒情報を記した魔法を読み取った鉄製の扉が開いた。
すばやく入りこんだヴァンを追って、クリスも中に入る。

地方や諸外国からの留学生が主に利用している寮は、それぞれの文化の違いから生活リズムが少しずつ違う生徒が暮らしている。
ほとんど不夜城のように一日中だれかが起きて活動していた。
そのため寮へ続く裏口だけは、いつでも手帳があれば出入り可能になっている。
ただし防犯のために門にかざした人物と、生徒手帳に刻まれた情報が食い違っていたら決して開かない仕組みになっていた。

勝手知ったる施設内を図書館に向って案内しながら、クリスは隣を歩くヴァンを見上げた。
ヴァンは今、月光をはじいて人目をひく明るい茶髪を隠すために外套を羽織っている。
フードの男と似通ってしまうので、本人は嫌そうにしていた。
だが誰かに見とがめられればクリスは特待生の待遇を取り消される

かもしれないし、ヴァンは不法侵入の追及を受けるだろう。
結局、隠れていくしかないのだ。
人通りの少ない廊下や、使われていない校舎のあいだを縫うようにして図書館に近づいていく。
歩きながらヴァンがぽつりとこぼした。
「この学校の仕組みって、わりと悪用されそうだね」
「裏口のこと？」
「それと、このやたら広い敷地に対して街灯の少なさ。人が隠れるにはもってこいだ」
「ううん、そうでもないわ。たしかに悪い人が隠れていてもわからない。でもその人たちがことを起こそうとしても、どの建物にも侵入できないから」

不思議そうな顔をするヴァンにクリスは学校の警備について語り始めた。
「その日の授業が終わると、使われない学舎や建物はすべて学校に勤めている警備担当の魔法使いと錬金術師たちによって戸締りが行われるの。入口だけでなく、窓や換気口にもすべて結界や錬成術で作られた罠つき。学校全体を結界で覆えれば一番早いでしょうけど、あいにくそれだけの力を持つ人は在籍していないわ」

そういえば国中をかこっている結界はだれが張ったのかしら、とクリスの思考は少し脱線した。
あれだけ強力で広い範囲を何日も何日も保たせることができるなんて、まるで伝説の青の森の魔女のようだ。クリスは幼いころの絵本の影響で、魔法使いとしても錬金術師としても彼女を尊敬していた。
大昔には「魔女」と言えば差別用語だったらしいが、今では尊称に使われるほどの意識改革を起こした女性。
不老不死でいまだにモナドのどこかで生きていると言われているが、クリスはさすがにそれは作り話だろうと思っていた。

思考から戻ってきたクリスは続けて、
「そして一日中活動している寮には、中にいる寮生を守るために彼らの一部が常に見回りをしているし。それらを何事もなくかいくぐるのは相当難しいはずよ」
と締めくくった。
ヴァンが驚きの声をあげた。
「え？それじゃ、図書館も入れないんじゃ？」
「そうなのよね・・・。でもヴァンはＡランクの冒険者だし、なんとかできないかな・・・とか・・・」
語尾を弱くさせながらクリスが言うと、ヴァンは困った表情で笑った。
「残念ながら、俺の魔法は初級がせいぜいだよ。力まかせに叩き壊せっていうならできないこともないだろうけどね」
「そうなの？浄化の魔法が苦手なだけだと思っていたわ。だからクレナダに私を同行させたのかしら、って」
「俺は万能じゃないし、世界一強い人間でもない。そりゃ冒険者の中じゃ腕は立つほうだ。でも、できないことはできない」
クリスは目をしばたたいた。
「私、あなたにできないことはないって思ってたわ」
「そりゃ買ってくれて光栄だね。だけど俺はあの男に負けたんだ・・・手も足もでないまま吹っ飛ばされた」
ヴァンは悔しさのにじむ口調で言った。
クリスもあのときのことを思い出してうつむく。あとから治癒を手伝ってくれたウンディーネに聞いたところによると、壁や床にたたきつけられた衝撃でふたりとも体中の骨が折れていたらしい。

激痛だったがすぐに治ったので、それほど重体とは思わなかったから驚いた記憶がある。
黙り込んでいるうちに図書館の前までたどりついた。

「入れないんじゃ仕方ない。ひとまずもう一度ウンディーネに呼びかけてみてほしい」
「わかったわ」

クリスはもう何度も試したことをもう一度繰り返した。
今度こそあの水の精霊が現れることを願って口を開く。
「ウンディーネ。来て！応えて！」

しかしあたりには静寂が漂った。
水の精霊のあの独特な間延びした声も聞こえない。
「だめか・・・じゃ次」
「次？」

落ち込みかけたクリスはヴァンの言葉にきょとんとした。
「建物の周囲を見て回ろうか。外からでも何か手がかりくらいは掴みたいね」
「そうね・・・窓や扉にさえ触らなければ大丈夫だと思う」

まだ諦めるのは早いと思い直したクリスはヴァンの提案にうなずき、ふたりで図書館のまわりを慎重に見て回る。
この建物は学校ができた当時から補修と補強を重ねつつ、現在まで利用されている５００年ものの歴史的遺物だ。
遠目には白亜の立派な建物だが、近くでよく見ると壁を塗りなおし

た跡がわかる。
特に何かを発見することなく、元の場所に戻ってきた。
クリスは見落としたものはなかっただろうかと思い返すが、やはり普段見慣れた光景しか浮かばない。
だがヴァンは少し思案気な表情をしたあと、ひとりでもう一度まわってくると言った。
「どうしたの？」
「違和感があるんだよね。どこって指摘できないから・・・こう・・・気持ち悪い。ちょっと行ってくるよ。ここを動かないように」
ヴァンはクリスの返答を待たずに、足早に行ってしまった。
月明かりに照らされて見つからないように、クリスはしゃがんで待つことにする。
しばらくするとヴァンが戻ってきた。
と思ったら、クリスにそのまま座っているように身振りで示してから、もう一周しに建物に沿って歩いていく。
「え・・・なんなの」
クリスは待っていることしかできないので、そわそわして落ち着かない気分に陥った。
ヴァンは最終的に5周も図書館の外側を見て回ると、ようやくクリスのもとに戻ってくる。
「やっと違和感のもとがわかったよ」
なにかを発見したらしいヴァンは、違和感が解消されてすっきりした表情をしている。
クリスは立ち上がりながら、ヴァンに続きを促した。
「建物じゃなくて、地面に原因があったんだよ。この場所から歩いて一周すると、ちょうど右斜めの方向が一番沈んでる」

「沈んでいる？」
「そうそう。地盤沈下してるんじゃないかな。遺跡の調査に行ったときにたまにあるんだよね、こういうことが」
地盤沈下は地面の下にある水脈などが枯渇したときに起こることが多い。
図書館が建ってから５００年の間に、そういうことがあってもおかしくはなかった。
普通に通り過ぎるだけでは気づかないほど、わずかな凹みなのだろう。
「でも水脈が枯れてしまったのは昨日今日の話ではないと思うわ。ウンディーネがいなくなった時期とあわない」
ヴァンは首を振ってクリスの言葉を否定した。
「地盤沈下の原因は水脈がなくなること以外にもあるんだよ。特に遺跡みたいなところはね。――地下通路だよ。長い間放置されていた地下通路の一部が崩れると、上の地面も崩落するんだ。この図書館はずいぶん古そうだし、遺跡みたいにそういうものがあるかもしれない」
「地下通路って・・・図書館で地下に降りる階段を見たことはないわよ。職員用のどこかからつながっているとしても、聞いたこともないわ」
長年冒険者をしているヴァンの言葉を疑ったわけではないが、クリスは驚いて絶句した。
「放置されすぎて、誰も気づいてないんじゃない？存在そのものが忘れ去られてるとか」
「・・・わからない。でも手がかりらしいものが他にないなら、調べてみたい」
「そう言うと思った。身代わりの彫像は持ってる？」

クリスは考えを見通されたことに赤面しながら、スカートのポケットを軽く叩いた。
「ここに入ってるわ」
「なら行こうか。俺が前。あんたは後ろ。いいね？」
「わかった」

先導するヴァンについて行きながら、クリスは今度こそウンディーネの行方がわかりますように、と心の中で何度目かの祈りを捧げた。

地盤沈下しているという場所に立ってみたが、クリスには地面が陥没しているようには見えなかった。
夜目が効かないだけでなく、その上を慎重に歩いてみても何も感じないのだ。
この微妙な凹みを違和感として認識したヴァンの能力の高さは、さすがＡランクの冒険者だと思わせた。
「クリス、“サーチ”の魔法は使える？」

―――“サーチ”。探索や物品の鑑定に使用される中級に分類されている魔法はすでに授業で習っている。
しかしあくまで学生が発動できる程度の小規模なものだ。
水系統の魔法ならウンディーネの加護のおかげで上級であっても使いこなす自信はあるが、他の分野は精霊の加護外である。
クリスはせっかく頼ってくれたのに・・・と申し訳なく思った。
「できるけど・・・ごめんなさい。範囲は１メートルほど先までしかわからないし、ぼんやりとしか解読できないの。もっと詳しいことを知りたいなら、直接触る必要があるわ」
「地下通路はだいたい３メートルから５メートル以上下にある。それ以上上に作ったら、ただ人が歩くだけで陥没するかもしれないからね。まあ、念のために一応“サーチ”してみてくれる？」
「そうね。やってみるだけやってみましょう」

ヴァンにもっとも沈んでいる場所を聞いて、その上に立ったクリスは深呼吸して気を落ち着かせる。
少しでも地下通路に近づくために、地面に手をついてから魔法を発動した。
「・・・“サーチ”」

クリスの脳裏に次々と情報が流れ込んでくる。
黒い。
暗い。
冷たい。
硬い。
小さな生き物の鼓動。

地下通路らしきものは読み取れない。
やはりもっと先にあるのだろうと、“サーチ”の範囲を意識を集中して広げる。
しかし1メートルと少し進んだあたりで、ぷつりと流れ込んでくる情報が途絶えた。
クリスの展開する“サーチ”の限界がきたのだ。
ふっと息をついて魔法を解いた。
「ダメね。分かったのはミミズとか虫の気配くらいで、あとは普通の地面よ」
「そっか。・・・どうするかな。いっそ掘ってしまえたらいいのに」
「それはあとで埋め直してもバレると思うわ」
「だよね」

時間をかけられるなら地盤沈下の件を校長あたりに知らせて、建物の保護と生徒の安全のためと説得して公式に調査することもできる。
そうなればいくら掘っても咎められないだろうが、今の状況は悠長に手続きを踏んでいられるようなものではなかった。
瘴気をまいてクレナダ村の人々を殺害したらしきフードの男の行方がかかっている。
もしこの皇都でクレナダ村と同じような事件が起きたら、人口が多

い分だけ被害は前回よりも確実に広がるのだ。
すでにあの事件から数週間たっている。
一刻も早く見つけ出す必要があった。
ウンディーネを家族同然に思っているクリスは、彼女の安否のためにも下手な行動を起こして時間を取られたくなかった。
掘った跡が見つかれば、説明を求められるだろう。
その手間が惜しい。
上級魔法の転移が使えれば一気に解決するが、まだ授業で習っていない上に、たとえ知っていても“サーチ”でこの有様のクリスでは発動するかさえ怪しかった。
「入口があればいいのに・・・」

ぽつりとつぶやいたクリスの言葉に、ヴァンはぽんと手を打った。
「それ、いいね」
「え？でも地下通路のことは忘れ去られてるって言ってなかった？出入り口なんて誰も知らないんじゃないの？」
「知らないなら調べればいいんだよ」

そう言ってヴァンは凹んでいるらしい地面の上を何度か往復した。
「うん。ここからこうして・・・右へ陥没してるから・・・。ああ、ここからは途切れてるか」
「なにしてるの、ヴァン？」
「凹みをたどってるんだよ。・・・この先に続いてる。陥没してない通路から先は読めないけど、少なくともこの方向に出入り口があると思う」

クリスはヴァンが指さす先を見て、このあたりの地図を思い浮かべた。
たしかこの先には十数年前に古い校舎を壊し、新設された用具倉庫

があったはずだ。
そこまで思い出したクリスは、さっと顔色を変えた。
「どうしよう！」
「え、なにが？」
「この先に入口がありそうな場所を思いついたけど、たぶんそれ・・・新しい建物の下に埋まってるわ」
「なんだって！？」

ヴァンは頭を抱えてうずくまった。
クリスも座り込んでしまいたい気持ちになるが、一応提案してみる。
「とりあえずその建物へ行ってみない？奇跡的に入口を見つけた人がいて、もっと奇跡的にそれが建物の外なら調べられるわ」
「奇跡を連発してる時点で絶望的だね」
「ほかに方法があるの？」
「いや・・・まあ、試してみるか」

ぐんとヴァンが伸びをしながら立ち上がった。
羽織った外套についた土ぼこりを叩いてクリスに案内を頼む。
「やれることは全部やってみよう。その建物への道は？」
「こっちよ」

用具倉庫に到着すると、図書館のときと同様にふたりは周囲をまわってみた。
このあたりは地盤沈下が起こっていないのか、起こっていたとしても十数年前の工事で平らにならされたのか。
ここに先ほどの地下通路がつながっているという証拠は見つけられなかった。
入口になりそうなものも見当たらない。

むしろ手入れが行き届いた地面には草ひとつ生えていないので、調べるまでもなく地下へ続くような穴はなかった。
「ウンディーネ・・・どこなの」
こんなふうに煮詰まったとき、おっとりとした話し方で場を和ませてくれる精霊の名前をクリスは口にした。
そのときクリスのすぐ下の地面から薄く光る物体が浮き出てきた。
「なっ、なっ！？」
「下がって！」
ヴァンが驚愕で言葉にならないクリスを引っ張って背に密着させるように庇う。
その物体は球体で、くるりと半回転した。
顔がついていた。
思わず硬直したクリスは、悲鳴を上げなかった自分をほめてやりたいと思った。
妙に簡略化されたコミカルな顔だが、それがくっついているのが光る球体だと不気味でしかない。
しかもボールのように弾んでこちらに近づいてきた。
ヴァンが剣を抜き放って構える。
「きらないで、きらないで。やめて、やめて」
口のような穴から幼児のような拙い言葉が出てきた。
「きっ、きもちわるい！」
「ひどい！」
クリスが思わず叫ぶと、球体がすかさず非難してくる。
ヴァンは剣先を球体に向けて構え直した。

「お前はなんだ？」
「ぼく、ぼく。すらいむ、じゅうさんごう」
すらいむ？なんだそれは。
じゅうさんごう？１３号だろうか。
正体不明の存在すぎる。
新しい魔物と考えるには、まったく敵愾心が感じられなかった。
すらいむじゅうさんごう、と名乗った球体はさらに続けて言った。
「さっき、さっき。みずのなまえ、なまえ。いってた、いってた」
「み、水？まさかウンディーネのこと！？」
「うん、うん。ふぇんりる、ふぇんりる。いっしょ、いっしょ。きて、きて」
言い終わるとすらいむじゅうさんごうは、また上下に跳ねた。
ヴァンは剣をすらいむじゅうさんごうに向けたままだが、こちらを攻撃する意思はなさそうだと判断したらしい。
クリスのほうを振り向いた。
「クリス、どうする？こいつの言うことが信用できるかは別として、手がかりが呼んでるみたいだよ」
クリスはしばらく悩んだが、ようやく掴んだウンディーネの足取りを逃すことはできなかった。
すらいむじゅうさんごうは気持ち悪いが、文句は言えない。
「行くわ。身代わりの彫像もあるし、ヴァンもいるもの」
「できるだけ守るけど、自衛も忘れないように」
「わかってるわよ」
きっちり釘を刺してきたヴァンに言い返して、クリスはすらいむじゅうさんごうに言った。

彼の背から出て向き合うには勇気がいるので、背中越しに声をかける。
「その場所につれて行って」
「うん、うん。ぱっくんちょ、ぱっくんちょ」

すらいむじゅうさんごうの体が膨れ上がったと思ったときには防御するまもなく、ふたりは巨大化した球体に包まれていた。
さらに次の瞬間には、固い石の上に投げ出される。
周りを見ると、どこかの回廊のようだった。
「ここ、ここに。いる、いる」

ヴァンが球体に殴り掛かった。剣でないだけ手加減したのかもしれない。
「おまえ！なにしたんだよ！」
「つれてきた、つれてきた。てんい、てんい」

もうどんな怪奇現象が起きても動じないかもしれない。

クリスはいっそ悟ったような目で遠くを見た。
見たこともない魔物のような生物に飲みこまれる。それがあろうことか上位魔法の転移の魔法をやすやすと操る。
常識ってなんだろう・・・。

クリスが遠いところに意識を飛ばしている間に、ヴァンがすらいむじゅうさんごうから詳しい話を聞きだしていた。

魔術学校の妖精　？

ヴァンがすらいむじゅうさんごうの話を要約した。
「こいつの話し方イライラするよ！・・・まあ、状況はわかったかな」

この石の回廊は先ほど調べていた地下通路らしい。
すらいむじゅうさんごうは地下通路の番人と出入口を兼用する、人工的につくられた生物なのだとか。
本人は人工妖精だと言い張っていたようだが、精霊の下位に属する妖精はもっと愛らしいものだったと思う。
クリスは避暑地の森など、人里から離れた場所で何度か見たことのある妖精の姿を思い出した。彼らは小鳥のような小動物や、蝶のような昆虫を模していたはずだ。
「この謎の生物がなにかはどうでもいいわ・・・。ここにウンディーネがいるのね？」
「そうみたい。ふぇんりる、とかいう謎の生物その2と一緒にいるんだってさ」
「ぼく、ぼく。すらいむ、すらいむ」

ふたりして謎の生物扱いしていたら、すらいむじゅうさんごうが話に割り込んできた。
謎ではないと言い張りたいようだ。
クリスはすらいむじゅうさんごうを無視して、ヴァンに話しかけた。
「ひどいよぅ、ひどいよぅ」と泣く声なんて聞こえないったら聞こえない。
「ここは出入り口の突き当りみたいだから、奥へ進むしかないわね」
「それはいいけど、こいつもついて来る気みたいだよ？」
「そんな謎の生物は視界に映らないわ」

「・・・クリス。そこまで気持ち悪かったんだね」
呆れたようなヴァンの口調が痛かった。
すらいむじゅうさんごうが再び泣き出した。

すらいむじゅうさんごうが飛び跳ねながら、ヴァンとクリスの前を進む。
回廊は人がひとり進む程度の幅しかないため、一列になって歩くしかない。
クリスはヴァンの背に隠れながら、離れないように慎重に歩を進めた。

回廊はすらいむじゅうさんごうの発する光で照らされ、薄暗いながらも視界は確保されている。
だが同じ風景が広がる回廊では時間の感覚がわかりづらい。
どれほど歩いたのか。
やがてクリスたちの前に石の扉が見えてきた。
その扉をふさぐように3分の1ほど下が軽く土砂で埋まっている。
「これが地盤沈下の場所かな？」

ヴァンが土砂に近寄りながら言った。
すらいむじゅうさんごうは器用に体を跳ねさせて土砂の上に登る。
「ここ、ここ。ふぇんりる、ふぇんりる、みず、みず。いるの、いるの」
「わかった。ちょい避けてて」

ヴァンはひとつうなずくと、剣の鞘で土砂をかきだそうと身を乗り出した。

クリスはこの向こうにウンディーネがいると思うと、嬉しさに頬を緩ませる。
そっと右太ももの紋を指でなぞって、もうすぐ会える家族に思いをはせた。

しかし、すらいむじゅうさんごうは土砂から飛び降りると身を水面のように震わせて口を開いた。
「あけたら、あけたら。ふぇんりる、ふぇんりる。おこる、おこる」
「おこる・・・怒る？」
「しょうき、しょうき。いっぱい、いっぱい」
「しょうき？」
「まもの、まものに。なっちゃった、なっちゃった」
「瘴気ね・・・それを早く言ってくれないかな」

その時にはすでにヴァンの手によって土砂は取り除かれ、扉は奥へ半分開いていた。
重低音の咆哮が後方にいたクリスの肌にまで突き刺さるように響き渡る。

すぐに扉を閉めようとしたヴァンは、奥にいたものを見るとすぐに剣を鞘から抜いて後ろに跳んだ。
扉がなにかに押しつぶされて、頑丈なはずの石とは思えない脆さで崩れた。
クリスはそれを棒だと思ったが、すぐに違うと気づいた。
大きな何かの生物の前足だ。

巨大な爪を持った前足が奥の部屋からこちらの回廊へ入ろうとしているのか、ガリガリと床の石材を削り取っている。
周囲の石壁も衝撃でぱらぱらと欠片を散らせた。
「ふぇんりる、ふぇんりる。こわいよぉ、こわいよぉ」

すらいむじゅうさんごうが前足の主に向って話しかけた。
この生物がふぇんりるらしい。
クリスはいつでも結界を展開できるように、頭の中で呪文を反芻した。
「ヴァン、ここを崩される前に逃げないと」
「どこに？出口もこいつだよ」

ヴァンは足元にいる球体を嫌そうに見た。
クリスもそのことを思い出して顔をしかめる。
出入り口を守る番人だというなら、この謎の生物が死ねばここに閉じ込められるということだ。
クリスは嫌悪感を抑え込んで、すらいむじゅうさんごうを呼び寄せた。
「ちょっと、そこは危ないからこっちにいて」
「だって、だって。ふぇんりる、ふぇんりるが」

動かない球体に業を煮やしたのはヴァンだった。
無言のまま強引に足で後ろに蹴り飛ばす。
クリスはその軌道上から外れていたのに、生理的に受け付けないものが飛んできたので反射的に横に避けた。
べちゃり、と音を立ててすらいむじゅうさんごうが床の上に楕円形ののびる。
「いたい、いたいよぅ。ひどいよぅ、ひどいよぅ」

床にべとりとへばりついたまま、しくしくと泣きだした球体を無視してヴァンが剣の腹に刻まれた模様をなぞった。
刻まれた軌跡が魔法の威力を増幅させる。
「炎よ！“ファイアボール”！」

初級の火の魔法がふぇんりるの足に炸裂した。
ふぇんりるの体毛をごうっと炎の塊が焦がす。初級魔法なので軽いやけど程度の威力しかなかったが、一瞬ひるんだ隙を逃さすヴァンは前足に切りつけた。
「クリスはここにいて！」

そう叫ぶと、勢いを保ったまま部屋へ突入していった。
クリスは追いかけそうになった足を止めて、ぐっと前を見据える。
足元ですらいむじゅうさんごうがブルブル震えていた。

ヴァンは部屋に飛び込むと、そのまま前転した。
すぐ隣をふぇんりるの強靭な顎が通り過ぎる。
ヴァンを噛み千切ろうとした歯を見せつけながら、こちらを見て唸る。

ふぇんりるは白い狼のような姿をしていた。
ただ狭くはない部屋の天井につくほど巨大だった。
その瞳は真っ赤に血走り、凶悪そうな爪と牙がのぞいている。

その背の向こうに見慣れた水の精霊が倒れていた。
ぴくりとも動かない。
物理攻撃がきかないはずの精霊を何が傷つけたのかはわからないが、ヴァンはまず目の前の魔狼を対処することにした。

真上からふぇんりるの爪が振り降ろされる。
それを剣で流して、懐に飛び込んで腹に一撃。
容赦なく斬りつけて、血しぶきを吹かせた。

痛みでふぇんりるがさらに狂ったような咆哮をあげる。
空気の振動で耳の奥がきんと甲高い音を立てた。
瞬間、ヴァンは部屋の壁に向かって吹き飛ばされていた。とっさに剣の腹を盾にしなかったら、鋭い牙に貫かれていただろう。
壁を蹴りつけて床に着地する。

衝撃を殺して身を低くして走り出した。
その真上をふぇんりるの払った尻尾がごうっと音を立てて通り過ぎる。
再び牙を剥いて口を開いたふぇんりるが、目の前に待ち構えていた。
「攻撃が単調なんだよ・・・っと！」

ヴァンは助走を殺さずに飛び上がった。
牙の攻撃を避けて右目に剣を突き立てる。
えぐるようにして、そのまま薙ぎ払った。
ぱっと赤い肉片が飛び散る。

あとは右目を失ったふぇんりるの死角から攻撃し続けた。
間もなく、ふぇんりるは沈黙した。

ヴァンに呼ばれたクリスは恐る恐る部屋に入った。
返り血を浴びたヴァンが外套を乱暴に脱ぎ捨てている。
その側には血まみれの狼のような生き物が横たわっていた。
「ふぇんりるぅ、ふぇんりるぅ」

クリスの横をすり抜けたすらいむじゅうさんごうが飛び跳ねながら近寄ったが、瘴気に侵されたという生き物が息を吹き返すことはない。

クレナダ村に同行したときはヴァンが生き物を殺す場面に遭遇しなかった。
死霊は生前の肉体の一部を核として持っていたが、それは死者のものなので新たな血は流れない。
フードの男と対峙したといっても、あっという間に気絶させられたので戦ったという実感はなかった。

けれど目の前にいるヴァンは血をまとって平然としている。
こんなことが日常茶飯事になるのが冒険者なのか。
クリスが呆然としていると、
「クリス、あそこにいる」

と、ヴァンが腕で顔についた血をぬぐいながら言った。
ゆるゆると視線の先を追うと、ウンディーネが倒れている。
そこではっとクリスは当初の目的を思い出した。
慌てて水の精霊のもとに駆け寄る。
「ウンディーネ、ウンディーネ！」

何度か呼びかけながらウンディーネの体に直接治癒の魔法をかけると、ぼんやりと彼女の青い目が開いた。
ふよふよと流水の髪をなびかせて、ゆっくりと身を起こす。
「ク・・・リスちゃん～？」
「ウンディーネ・・・よかった・・・」
「おはよ～ございます～」

あまりにも呑気な再会のあいさつに、クリスは脱力した。
「おはようじゃないわ。ここでなにがったの？」
「え～と～。これ見つけちゃった～」

そっと手のひらに握りこんでいたものを、ウンディーネはクリスに差し出した。
そこには紫色の石がある。
表面には幾何学的な模様が描かれ、芸術的だ。
クリスは紫水晶かと思ったが、それにしては反射する光が鈍い気がした。
もっとよく見ようと目をこらしたクリスに、ウンディーネは告げた。
「これ～瘴気の塊みたいな～、すっごく嫌なかんじなの～」
ヴァンがクリスの後ろから手を伸ばして、ウンディーネから石を取り上げた。
すらいむじゅうさんごうの淡い光のほうを向いて、石を眺める。
「ただの宝石に見えるけどな・・・」
「でも～、あの村で感じたものと同じよ～？」
ウンディーネの言葉にひゅっとヴァンは息を飲んだ。
クレナダ村を廃村に追い込んだ元凶が手元にあるかもしれないのだ。
クリスは目を見開いてそれを見た。
ヴァンはぐっと石を握り締めると、クリスに向き直った。
「浄化の魔法をかけてほしい」
クリスは無言でうなずいた。
こんなものがここにあってはいけない。この石のせいでクレナダ村は惨事に見舞われ、ふぇんりるという生物が魔物化したというなら拒否する理由などなかった。
クリスはウンディーネに力を借りながら、最大の魔力を込めて浄化の魔法を発動させた。
しかし浄化の光は石の表面の模様に吸い込まれるようにして消えた。
「え・・・」

「あら～？」

石を持ったヴァンと、魔法を無効化されたクリスとウンディーネの沈黙が横たわった。

魔術学校の妖精　？

クリスはお茶を一口飲むことさえ緊張を強いられていた。
目の前にはモナド皇国の最高権力者、皇帝陛下が真向かいに座っている。
皇帝の後ろには宰相閣下と財務大臣。

国の中枢にたずさわる人物にかこまれたクリスは、隣に座るヴァンが平然と茶菓子を食べていることに目まいを覚えた。

なぜこんなことに・・・。
思い返せば2日前に記憶が飛んだ。

あのあと何度か改めて浄化の魔法をかけ直したが、ひとつも効力を発揮できなかった。
ウンディーネも疲れたと言って、クリスの紋の中にするりと入って行った。
契約者の紋の中には亜空間のようなものがあるらしく、なかなか快適だと本人に聞いたことがある。

とにかくこれは自分たちの手に余る、クリスもヴァンも判断した。
さっさとギルドに持ち帰ることにする。
クリスは石を慎重にハンカチで巻いた。ヴァンが足りないと言いたげに、さらに上から外套で乱雑にくるむ。
あとは一刻も早くこの場を離れるだけだ。
クレナダのときのようにフードの男が、いつこの石を回収しに来るかわからないのだから。

もし鉢合わせて戦いになったら、この狭い部屋でクリスを守りながらの苦戦になるは目に見えている。

ヴァンはフードの男の捕獲命令を受けていたが、あくまで彼我の実力差を自覚していた。
万全の状態で、かつわなを仕掛け、不意打ちをつくべき相手だ。
それは今ではないし、戦利品の石もある。
今回はこれで退いておいたほうがいい。
慎重になりすぎることはないのだ。

すらいむじゅうさんごうは、ふぇんりるの死骸に寄り添っていたが、クリスたちが帰還の旨を伝えるとすぐに了承した。
「かなしい、かなしい。でも、でも。まものままま、まものままま。それより、それより、きっと、きっと。うれしい、うれしい」

ヴァンはふぇんりるを殺すことは必要だったと後悔していなかったが、少しだけこの球体の生き物に悪いことをした気になった。
すらいむじゅうさんごうの転移によって外に出ると、すでに夜明けの藍色の空が広がっていた。
日の出も近い。

すらいむじゅうさんごうは出てきたときと同じように、くるりと回転すると地面に吸い込まれるようにして地下の回廊に戻って行った。
「さて、あとはこれをギルドに持っていくだけだから、ついでに家まで送るよ」
「え？私もギルドに行かなくていいの？」
「家を抜け出したことがバレたらどうするんだよ、お嬢様。もう朝まで時間がないよ」

からかうように諭されたが、両親に夜中の不在を知られるのはまず

いとクリスもうなずいた。それにこのままでは朝早く動き出す寮生に見つかる可能性もある。
「そうね、さっさと学校も出て帰りましょう」
ふたりは小走りで夜明けの街を駆け抜けた。

そしてその日の夕方。
寝不足を抱えながら、クリスはようやく夜番の仕事を終わらせた。
それを施設の隅に座って待っていたヴァンが近づいてくる。
クリスも上司をひとり呼んで、情報交換を始めることにした。
「ヴァン君が今朝持ってきてくれた例の石は、もう国の連中に渡したよ。今ごろ宮廷魔法使いや錬金術師たちが研究を始めてるはずだ。遠からずどのような仕組か解明されて、無力化や浄化も可能になるだろう」
「そうですか。あの・・・石を手にした経緯とかは」

クリスは学校に不法侵入したことや、地下回廊の人工妖精――――妖精とは認めたくないが、定義上そう呼ぶことにした――――のことを、どう説明したものかと口ごもった。
「俺もまだそのあたりは詳しく説明してないよ。クリスと同じときに言ったほうが、お互いの視点からの話もできるしね」
「そうね、じゃあ・・・」
「いや、待ってくれ」

考えながら説明を始めたクリスを遮ったのは、難しい表情をした上司だった。
「昼過ぎに国から君たちへの召喚の言伝を承っている。直接話をお聞きになりたいそうだ」

「お聞きにって、どなたが？研究してる方たちでしょうか？」
クリスが首をかしげながら問うと、上司は疲れたように首を振った。
「いいや、陛下が」
「え、」
思いも寄らない人物の名前にクリスは硬直した。
貴族の末端として皇帝陛下が主催する夜会に出席したことはあるが、そのときだって遠目で「あら、陛下は金髪なのね」と離れた場所で見ていた。
落ちぶれた貴族が顔をあわせる機会など皆無だ。
動揺して目線があちこちに飛ぶクリスをよそに、ヴァンは面倒そうにため息をついた。
「ああ、おえらいさんがズラっと並んでそうだね」
「どうしてそんなに平気そうなの！？」
「Aランク冒険者を雇うのは、ほとんど金持ち貴族だからだよ。相手するのは慣れている。さすがに皇帝陛下ほど位の高い人は初めてだけどね」
もしかしなくても貴族のクリスより、冒険者のヴァンの方が貴族間の処世術を身に着けているように見えた。
微妙に負けた気持ちになりながら、クリスは上司に尋ねる。
「召喚状はありますか？日時の確認をしておきたいです」
「これだよ。ほら、こっちはクリスちゃんの分。これはヴァン君の分」
召喚状を受け取ったクリスはそろそろと封を開けて、書面に目を落とした。
略式だが、宰相閣下直筆の呼び出しだった。
登城日は2日後だ。

2日で納得のできる説明を順序立ててできるようにしなければ。
あとドレスも新調しないと。いえ時間がないからなんとか見栄えのいいものを用意したほうがマシね。
学校にも連絡しなきゃ。欠席で試験の評価が落ちて・・・って、あら。その日は休日ね。
よかった。

つらつらと考えていると、ヴァンがクリスの肩をつついた。
「なに？」
「普通に初めから説明してたら長くなりそうだからね。重点を決めて簡潔にまとめたほうがいいんじゃないかな。滞在時間を長くしたいなら別だけどさ」
「そんなわけないじゃない。畏れ多くてすぐに帰りたくなると思うわ」
「なら、打ち合わせようか」

ヴァンの言葉に、クリスではなく上司がうなずいた。
「是非そうしてくれ。私やギルドには国から連絡がまわってきたらわかることだから、そちらを優先してほしい」
「了解っと。それじゃクリスを借りていくけど構わないよね？」
「早めに返してくれよ？貴重な受付専門なんだ」
「わかってるよ」

クリスが口をはさむ間もなく、とんとん拍子に話がまとまった。
ヴァンにうながされて立ち上がりながら、クリスは失くさないように召喚状を懐に入れる。
「どこに行くの？」
「近くの喫茶店。そういうところのほうが女の子は好きそうだし」
「嫌いではないけど」

「じゃ、そこで」

あっというまに大通りにある喫茶店に連れてこられたクリスは目を白黒させた。
やけにヴァンのエスコートがうまく、手慣れているように感じたのは気のせいだろうか。

喫茶店は乳白色を基調とした清潔な雰囲気の店だった。
窓際に置いてある花の鉢植えや、壁際の小さな椅子に座っているクマのぬいぐるみなどが可愛らしい。
日が落ちたためにランプを天井からつるして灯りを取っている。

店内は女性客が多く、冒険者の装いをしているヴァンは浮いて見えた。
彼自身はちっとも気にならないらしく、店員に合図を送ってから窓側の席へ進んでいく。
クリスたちがテーブルにつくと、さっとメニューが店員から手渡された。

クリスは学校のクラスメイトたちがこういった場所に放課後寄り道したり、遊んだりしていることは知っていた。
だが成績を維持しながらアルバイトをこなす身で、そんな余裕はなかったので喫茶店でなにを頼めばいいのかわからない。
だからヴァンに「嫌いではない」と答えたのだ。「好き」かもわからないくらい馴染みのない場所だったから。
「なにを頼むか決まった？」

クリスはメニューから顔を上げずにうなった。
メニュー内容がさっぱりわからない。
「ねえ、ヴァン・・・。お姫様の口どけとか、白雪の雫って料理の

名前なの？」
「ああ、それは創作料理とか。見た目からとった通称みたいなものだよ。普通の料理名を書いてる喫茶店のほうが多いけど、ここは違うみたいだね。気になるなら店員に料理の中身を訊いてみるか、いっそ勘で頼んでみるのも楽しいよ」
「そういうものなのね・・・じゃあ、勘で挑戦してみるわ」

せっかく普段縁のない場所に来たのだから、楽しんでもいいなとクリスは思った。
料理を頼んでしばらく待つと、クリスの前にはお姫様の口どけ。
ヴァンの前には黒い発酵茶が置かれた。
クリスは料理名を口にするとき少し気恥ずかしい思いをしたが、ヴァンは「一番いい発酵茶で」と、メニュー名ではない名前で注文していた。
ヴァンいわく、どこの飲食店でも発酵茶は常備されている庶民の飲み物なので、この店でも単品で頼めるはずだ、ということらしい。
自分で挑戦するときめたものの、通称のメニュー名で恥ずかしい思いをしたクリスはつい恨めしい目を向けてしまった。

お姫様の口どけ――――木苺のムースタルト――――を口に入れたクリスは、とろけるような舌触りにうっとりした。
ついてきたミルクも砂糖か蜂蜜が入っているらしく、ほんのりした甘さがちょうどいい。
「おいしい・・・」
「そりゃよかった」

頬を緩めながら、クリスはタルトを完食した。
そして最後にミルクを飲んでほっと一息ついたとき、はたと気づく。
ものすごく微笑ましいものを見るような目でヴァンが笑っていた見ていた。

食べ終わるまでずっと見られていたらしい。
「こういう店は初めてみたいだったからね。心配したけど、気に入ってくれたみたいでよかったよ」
「・・・うん。でも見てないで声をかけてくれればよかったのに」
「ごめんごめん、なんかなごんじゃって。つい見てた」

クリスは頬を染めて、むっと口をとがらせる。
子どもっぽいと思われたらしい。
羞恥に言い返したかったが、いい反論を思いつかなかったので話を変えることにした。
「それよりも！2日後の打ちあわせをしましょ」
「はいはい」

さらに微笑ましそうに見られた。なぜだろう。

魔術学校の妖精　？

クリスはヴァンから視線をそらして、話を続けた。
「陛下はお忙しい方。面会の時間を短く済ませるためにも、要点だけまとめてご説明した後は、詳しいことを書いた書類で補ってはどう？」
「俺、貴族の書類なんてわかんないよ？」
「それは私が書くわ」
「なら、話す重要な部分だけまとめようか。ウンディーネにも協力してもらおうよ」
「そうね。あの場で何があったのか、まだちゃんと聞いてないし」

クリスはそっと右太ももの紋を撫でて、ウンディーネを呼んだ。
急に流水の乙女が現れた店内は少し騒然としたが、何人かはクリスの顔を見て納得した表情をした。
男爵令嬢クリス＝ルクスが上位精霊の契約者であることは、皇都の魔法に携わる者ならわりと有名である。魔術学校でもクリスは特に隠して生活しているわけではない。
「どうしたの～？クリスちゃ～ん」
「聞きたいことがあるの。どうして呼びかけに応じなかったのかとか、あの部屋でなにがあったのかとか」

ウンディーネは手を顎に当てて、やけに人間臭いしぐさで口を開いた。
あいかわらず顔は能面のように動かないが。
「そうね～。クリスちゃんと図書館でお別れして～、飛んで遊んでいたら～・・・地面から出られなくなっちゃったの～」
ウンディーネが言うには、水の精霊のからだは水の粒子そのもの。

それを霧のように自在に姿を変えられるらしい。
それを応用してネズミでも通り抜けられないほど狭い隙間を通り抜けたり、雨が地面に染み込むように中にもぐりこんで遊んでいたという。
「それって楽しいの？」

ついクリスは訊いてしまったが、ウンディーネはこくこくと何度もうなずいた。
精霊の感覚は人間には理解できないようだ。
「それでね～。ず～っと潜って行ったら、おっきな狼さんがいたからびっくりしたわ～。それでね～魔物化してるみたいだったから～、近寄らないで別のところに行こうとしたの～」
「できなかったんだね？」

ヴァンが確かめる口調でウンディーネに尋ねる。
「そうなの～。あの部屋から出られなくて～困っちゃって～。変で～嫌な石も見つけちゃうし～。だから～狼さんの寿命が来るまで待とうと思って～、寝てたの～」
「倒れてたんじゃなかったのね」

クリスは脱力した。
呼んでも来ないし、見つけたら見つけたで床に伏せる精霊。
どんな凶事が起こったのかと心配した気持ちを返してほしいくらいだ。
「でもでも～。クリスちゃんが起こしてくれなかったら～、きっと１００年くらい眠ってたから～、来てくれてよかったわ～」
「そんなに時間がたったら人間は死んじゃうもの～」と、のほほんと笑うウンディーネ。
クリスは己の契約精霊のあまりの呑気さに、気力を根こそぎ持って

行かれた気分になった。
けれど気になることがあったので、ヴァンに問いかける。
「ねえ、ヴァン。魔物に寿命はあるの？」
「専門家じゃないからはっきりわからないけど、あるみたいだよ。魔物は瘴気に侵された生き物が狂ったなれの果てらしいから、そのもとになった生物の寿命に依存するらしい。猫とか犬だと長くて１０年くらいかな。クレナダ村にいた死霊のようなものだと、核がなくなるまで動き続けるから１００年単位で考えないといけないだろうけどね」
「瘴気に狂う・・・」

———瘴気。
どこから生まれ、どうやって発生するのかも解明されていない力。
昔から人間には普段見えないが、世界中に存在するらしい。
その力は生物を侵食し、理性を奪い、狂暴化させ、魔物に堕とす。
普段見えなくとも、凝縮した瘴気だと視認可能という噂もある。
ひとつ言えることは、浄化の魔法が効果的なことから決して益のあるものではないということだ。

ただ、瘴気を発していたらしき石を持ってもなんともなかったクリスは、浸食される感覚がわからなかった。
それとも長い時間をかけてゆっくり作用するのだろうか。

クリスが考え込んでいるあいだに、ヴァンも気になることが出てきたらしい。
「そういえば、あの例の謎の生物は魔物化していなかったね」
脳裏にコミカルな表情の球体生物が浮かんだクリスは、不快感に眉を寄せる。
「あいつにも話を聞く必要があるね」

「・・・私も行かなきゃダメかしら？」
できれば二度と会いたくない存在である。
しかしヴァンはウンディーネを指さしながら言った。
「ウンディーネしか地下に潜れない。あの生き物が自発的に地上に出てこない限り、俺たちに会う手段はないよ」

ウンディーネの契約者はクリスである。
またクリス自身も事件に関わった人間だ。
なにより皇帝陛下に説明するというのに、気持ち悪いからといって手間を省くことなどできない。
拒否することはできそうになかった。
「わかったわ・・・。それじゃあ学校の門が閉まる前に今から行きましょう。また夜中に忍び込みたくないもの」
「まだ開いてるの？」
「魔法や錬金術の自主練習は夜の7時まで認められているわ。それまでなら開いているはずよ」

クリスは壁にかけられた時計を見た。
５００年前から錬金術が発達するようになり、こういった便利な道具の普及が進んでいる。
時計は最たるもので、昔は大貴族が大金を積んでも入手困難だったらしい。
その時計の長針も短針も６の数字をさし示していた。
「６時半か。急げば間に合うかな」
「ええ。ここから学校まで１０分もかからないわ」

クリスはそう言って立ち上がりながら伝票に手を伸ばした。
指先がふれる寸前でヴァンが横からかっさらう。
「え、ちょっと。自分の分は自分で払うわ」

「俺が誘ったんだからおごるよ」
「でも」
「おごられてなよ、苦学生」

苦学生という言葉に、クリスはぐっと詰まった。
そのあいだにヴァンはさっさと会計を済ませてしまう。
そのまま外へうながされて、慌ててクリスはヴァンに続いて通りに出た。

魔術学校へ向かう道すがら、クリスはヴァンに言った。
「ありがとう・・・でも次は私がおごるから」
「遠慮しなくていいのに。俺ってけっこう稼いでるんだよ？」
「そうね、きっと私の家の全財産より稼いでるでしょうね。でも遠慮とかじゃなくて、けじめなの」

世界でただ一人のAランク冒険者のヴァンが依頼を1つこなすのに、どれだけの金貨が動くかなんて考えただけで目まいがする。
けれどクリスは財政難にあえぐ男爵家を知ったときから、実家のために自分でできることはすべて自分でこなしてきた。
特待生になるために猛勉強したし、半額になった学費を払うこともアルバイトをして賄う。

硬いクリスの表情に、ヴァンは面白そうな声を出した。
「ふぅん、クリスは生真面目だね。じゃあ次は期待してる」
「え。あれ？・・・あ、うん」

無意識の流れで、またヴァンと出かける約束をしてしまったクリスは首をひねったが、
いまさら撤回もできないので仕方なくうなずく。
そんなふたりの上空をただよいながら、ウンディーネが「クリスち

ゃんって〜、おもしろ〜い」と言った。

ぽよんぽよんと跳ねる球体から、クリスは視線を逸らした。
あのあと閉門する前に魔術学校に入ったふたりは、用具倉庫まで再訪してウンディーネに
地中に潜ってもらった。
そして人目を避けるために地下の回廊まで潜っている。
その際に再びすらいむじゅうさんごうに飲みこまれて転移したので、もう丸いもの全部がトラウマになりそうだった。

・・・ふぇんりるの死骸がある部屋には入っていない。
まだ血の海に沈んでいると思うと足がすくんだ。
そんなクリスを見ていたすらいむじゅうさんごうは、線にしか見えない眉を器用に下げて情けない顔をした。
ヴァンが腰を落として球体に尋ねかける。
「ちょっと訊きたいことがあるんだ」
「ぼく、ぼくに。ききたいこと？ききたいこと？」
「ああ、いろいろね。まず、あの石はなぜここにあったのさ」
「しらない、しらない」
「知らない？フードをかぶった男は来なかった？」
「にんげん、にんげん？きてない、きてない」

すらいむじゅうさんごうの返答は簡潔だった。
ヴァンは考えることを後回しにして、疑問点を次々と質問していく。
「あの狼は魔物化したのに、お前が無事なのはどうして？」
「ぼくの、ぼくの。のうりょく、のうりょくは。“まほうをつかえるていどののうりょく”だから、だから」
「能力？」

「まじょ、まじょが。くれた、くれた。ぼくらを、ぼくらを。つくって、つくって、くれたの、くれたの」

クリスは驚愕のあまり見ないようにしていた球体のほうをふりむいた。

「魔女ですって？まさか青の森の魔女？」

「うん、うん」

思わぬところでモナド皇国の伝説の名前が出てきたと、ヴァンも驚いた。

すらいむじゅうさんごうは続けて言った。

「ぼく、ぼくも。しょうき、しょうき。あぶなかった、あぶなかった。でも、でも。まほうで、まほうで。じょうか、じょうかした」

５００年前。

モナド皇国が建国された当時、まだ盤石ではなかった国のために魔女エレオノーラは要となりそうな施設を守護する方法を編み出したらしい。

それが人工的に妖精を生み出して、役割と力を与え、土地と契約するもの。

魔女はすらいむじゅうさんごうに“魔法を使える程度の能力”与え、ふぇんりるには“人間を幸運にする程度の能力”を与えたという。

さらに妖精たちに共通の能力を１つ、自動的に発動し続けるような“主に空間を固定させる程度の能力”をほどこした。

建物と地盤を維持し、上で暮らす人々に安寧をもたらす力。

ふぇんりるが瘴気に侵されて狂っていったとき、すらいむじゅうさんごうは自身を浄化しつつ、同胞にも魔法をかけようとしたらしい。

しかし、すらいむじゅうさんごうの魔法は球体の内側で発動するものだった。

飲みこんで身の内に取り込まなければ、他者に魔法をかけられないのである。地下回廊を行き来するのに、人間を丸呑みするのもそのためだ。

本来魔法にそんな規制はない。
すらいむじゅうさんごうが言うには、人工的に妖精を模写したら劣化したものができあがるという。
どういう具合に劣化するかは人工妖精ごとに違ったようだが。
「まじょ、まじょにも。せつりは、せつりは。かえられない、かえられない」
「じゃあ、ふぇんりるを飲みこめばよかったじゃないの」

クリスは憧れのエレオノーラの話に少し興奮しながら言った。
球体の人工妖精は悲しげに身を震わせる。
「ふぇんりる、ふぇんりる。よけて、よけて。だめだったの、だめだったの」

そのまま床に楕円形に広がってしくしく泣きだした。
黙って話を聞いていたウンディーネは退屈してきたのか、すらいむじゅうさんごうの真似をしていっしょに床にべちょりと広がる。
ふたつの水たまりのような生き物ができあがった。

呆れた目を向けながらクリスは、避けたくなる気持ちはわからなくもないと冷静な感想を抱いた。
ただ同胞のふぇんりるの場合は気持ち悪さからではなく、瘴気によってまともな判断ができなかった結果かもしれない。
そしてとうとう完全に魔物化してしまった。

そんなときにウンディーネがたまたまやって来たのだという。
ウンディーネは正規の扉であるすらいむじゅうさんごうの転移では

なく、地面をもぐってやってきた。
そのため魔物化しても自動発動し続けていた、ふぇんりるの“主に空間を固定させる程度の能力”がウンディーネを訪問者ではなく、建物の一部が落ちてきたと認識したらしい。
その動く“建物”を固定させるために、ふぇんりるの能力はウンディーネを部屋に閉じ込めた。

水たまりから球体に復活したすらいむじゅうさんごうが、ウンディーネのほうを向いて言った。
「ごめんね、ごめんね。たすけたかった、たすけたかった。でも、でも・・・」
「気にしないで～。私、寝てたから～」

ちょっとは気にしたほうがいい。
クリスは心の中でつっこんだ。

ヴァンが話の筋を戻すように口を開いた。
「んで、困ってるところに水の精霊の名前を呼ぶ俺たちを見つけたってわけ？」
「うん、うん。そうなの、そうなの。たすけてほしくて、たすけてほしくて。ここから、ここから。でたの、でたの」
「なるほどね」

クリスは頭の中で話の内容を整理しながら、ふとこの回廊について疑問に思った。
地下回廊はどこかに通じているわけではなく、小部屋とそれにつながる行き止まりの通路があるだけだ。
「ねえ。ところでこの地下の空間ってなんのためにあるの？私、学校でこんな場所があるなんて聞いたことなかったわ」
「ここ、ここ。ひみつのこべや、ひみつのこべや」

「秘密？どうして」
「しらない、しらない。まじょ、まじょが。がっこうには、がっこうには。ひつようだって、ひつようだって」
「・・・よくわからないけど、伝説の魔女のことだもの。きっと深い意味があるのね」
無理やりクリスは自身を納得させた。

おおよその事情を把握したクリスとヴァンは、すらいむじゅうさんごうに別れを告げて地上に戻り、急いで学校から出た。
閉門ぎりぎりの時刻である。
「じゃあ、私はこのままギルドの仕事が終わったら、家で書類にまとめるわ」
「そうだね。そっちは任せるよ」
「ええ。じゃあ2日後に」
そして目の前の状況ができあがった。

魔術学校の妖精　？（後書き）

エレオノーラ「魔法の学校に秘密の小部屋はデフォでしょ。大きな蛇も、例のあの人もいないけどねぇ」

魔術学校の妖精　？

回想から意識を戻したクリスは、ゆっくりと手元のティーカップを机に戻した。
彼女がまとめた書類は宰相の手にある。
すでに事件のあらましはヴァンが説明したあと、クリスは補足の情報をつけたした。

そうして言うべきことがなくなると、皇国の中枢はそれぞれに考え込んだ。
彼らの中でどんな結論が出されたのか、クリスははらはらしながら視線をあげた。
皇帝陛下の緑の瞳とかちあう。
びっくりして目を見開く少女に、皇帝はふっ笑いかけた。
壮年の偉丈夫の目じりに人懐こそうな印象を与える皺が寄る。
「よく調べてくれた。引き続き指名手配の男の情報を追ってもらいたい。・・・だが、いくつか黙っていてもらうことができたな」
「はい、陛下。なんなりとお申し付けください」
「1つ、余の祖。魔女エレオノーラのつくった人工妖精のこと。2つ、瘴気を撒く石がまだ浄化されておらぬこと。あとは・・・宰相、財務大臣。なにかあるか？」

皇帝の言葉を継いで宰相と財務大臣が口を開いた。
「陛下、犯人らしき男が人間ではないかもしれぬことも黙っていてもらうがよろしいかと存じます」
「そもそも魔術学校に侵入されたこと事態を、内密にした方がよろしいのではないでしょうか」
ふたりの言葉に皇帝はうなずいた。

「では、この４つの沈黙を命ずる」

クリスは内容に気になる部分があったが、命令に応じようとした。しかしヴァンが片眉を器用にあげて遮る。

「待ってくれないかな。３つ目の犯人が人間じゃないってどういうこと？」

説明のあいだも敬語を使わないヴァンだったが、クリスの心配をよそに皇帝たちは無礼を見とがめなかった。

皇帝は「我が国の民ではない。ましてや貴族でもない者に忠誠や敬う心は求めぬ」と、ヴァンの行動を容認したのである。

今も命令をすぐに受けなかったが非難されなかった。

宰相がクリスの書類に目を落としながら、ヴァンの疑問に答えた。

「１つ１つ理由を述べましょう。１つ目の沈黙は、この国の礎がいまだ人工妖精に支えられていることが諸外国に漏れては一大事だからです。モナドは自力で大陸の覇者であり続けねばなりません。国の威信というやつです」

それはクリスにも理解できたのでうなずいた。

隣でヴァンも静かに首を縦に振る。

「２つ目の沈黙は、国民に不安を与えないためです。生物を魔物に堕とす元凶が排除されていないことは、大いに世論を騒がせるでしょう。ただでさえ国境が結界で封鎖されておりますから、どれだけ救済策を出しても圧迫された精神が暴動に結びつかないとも限りません。少なくとも石の解明が済み、浄化する方法が発見されるまでは黙っていていただくことになります」

宰相は眼鏡を押し上げて、ため息をついた。

４つ目の沈黙を提言した財務大臣のほうを見やって言う。

「疑問を呈された3つ目は最後にご説明します。4つ目の沈黙は、国の威信も関係がありますが主に国庫の問題ですね」
「そのとおり。外国の要人も留学している場所に侵入者などあってはならん」

外国からの留学生がもたらす経済的利益は大きい。
留学生が自国へ戻ったときに魔術学校をアピールすれば、観光にやってくる人間もいる。
さらにまた留学生を送ろうと考える国も出るだろう。
加えてそれが要人であれば、彼らに随行してきた人間たちが消費する生活物資の分だけ周囲の店が潤う。
それなのに魔術学校が安全ではないとなれば、留学する者は激減する。
経済の回転はとどこおり、国庫に直撃するだろう。

財務大臣は淡々とそう説明しながらも苦い表情をしていた。
宰相が話を自分に戻す。
「1つ目、2つ目、4つ目は納得していただけたと思います」
「そうだね。それで肝心の3つ目は？」

ヴァンが続きをうながした。
「人工妖精の発言に問題があるのですよ。地下に人間は来ていない。では、人間以外は？ルクス男爵令嬢の精霊のような存在なら、小部屋へ自由に入れます」

その発言にクリスは首をかしげた。
「よろしいでしょうか？」
「どうぞ、ルクス男爵令嬢」
「ウンディーネは妖精の力で小部屋に閉じ込められ、自力では出てくることができませんでした。犯人が地面に潜って石を置いたなら、

彼もまた出られないのでは？」
「それは人工妖精が魔物化せず、暴走状態ではなかったからでしょう。理性を持った人工妖精が意志あるものを、無機物と誤認して固定の力をふるうとは考えられません」
「ずいぶん人工妖精を買ってるんだね」

ヴァンが冷やかに評した。
それに皇帝が苦笑しながら言葉を発する。
「人工妖精と交流を持っておれば、そう考えもする。そなたらはこの国の要所に彼らがいることは地下で聞いているはずだな？当然この城にも存在する。余は幼き頃から彼らと接してきた。この宰相と財務大臣も余の乳兄弟ゆえに知っておる」

クリスは目を見開いた。
頭の中ですらいむじゅうさんごうの球体が分裂して、いくつもの丸い人工精霊が城にいる様子が浮かぶ。
すぐに狼の姿をしていたふぇんりるを思い出して、そんな妖精の姿ばかりではないはずだと首を振って否定した。
あんなものが城中にいるとは考えたくない。

ヴァンがその明るい茶髪の髪を乱暴にかき回してから言った。
「犯人が人外の可能性が高いことはよくわかったよ。それと、ここに人工妖精がまだいることを知られて魔物化させたくないってこともね。口止めの本当の目的はそっちでしょ」
「そうだな。宰相が述べたことも真実だが、否定はせぬよ。彼らへの愛着もあるが、魔物化して国の基盤が揺らぐことこそ恐ろしい」

だんだん自分の顔がこわばっていくのが、クリスにはよくわかった。
ここで聞いていることは、末端の貴族が知っていいことではない。
この情報はモナドを崩壊させる引き金そのものだ。

じっと青ざめるクリスの表情を見ていた宰相が口を開いた。
「ご理解いただけたようですね。陛下の沈黙の命、受けてくださいますか？」

クリスに否はない。
むしろギルドで上司が「国への報告を優先してほしい」と言ってくれて助かったと思った。
そのおかげでクリスはギルド職員にも家族にも相談しないまま、皇帝陛下へ奏上する書類作成に追われたのだから。
「はい・・・。この生命にかえても決して口外いたしません」
「俺も構わないよ。冒険者の依頼人への守秘義務に入るだろうしね」

ヴァンも諾と返事をした。その口調が軽いのは彼がモナドに属していないからだろうか。
クリスはなんとなく不安になって、ヴァンの青い目を見つめた。
その視線に気づいたヴァンが「なに？」と問いかけてくるのに首を振る。
不安の理由がわからないのに、言葉にできなかった。

城を辞したクリスは、ヴァンと男爵家の馬車に乗っていた。
彼は窓から大通りを眺めている。
このままギルドにヴァンを送ったあと、クリスは自宅に戻る予定だった。
ヴァンは振り出しに戻ったフードの男の情報をまた集めるために。
クリスはまだアルバイトの時間まで余裕があるので、ドレスを着替えに。

不意にヴァンがクリスを見た。
上から下までまじまじと観察される。
「どうしたの？」
「いや、その恰好で喫茶店に入るのは目立つよね」
「え？それはそうでしょうね」

話の流れはわからないが、このドレスで通りを歩くのは勇気がいる行為だった。
クリスの夜明けの色をした髪と、湖面のような瞳にあわせた特注品である。
青を基調に藍色のフリルをふんだんに使った、色のグラデーション。
ボンネットには控えめながら精緻な青薔薇が刺繍されている。
首元のチョーカーもそれに合わせてたもので、蒼いサファイアの宝石が薔薇の形に咲いていた。
財務が圧迫している男爵家だから、手持ちのドレスは数点しかない。
しかしそのなかで一番仕立てに力を入れさせたものだ。
「じゃあ着替えてからでいいかな」
「だから、どうしたの？話が見えないわ」
「あれ、忘れちゃった？またお茶する約束したよね」

クリスは2日前のやり取りを思い出した。
今度は自分がおごる、と確かに言った記憶がある。
「そういえば約束したわね。私は構わないけど、あなたはあの男の情報を集めなくていいのかしら？」
「しばらくの間は仕事にならないよ。城の人間に見張られてたら、下手に情報屋とか接触できないね」
「城の？」

クリスも窓から外を見たが、男爵家の馬車に併走しているものは見当たらない。

ヴァンが彼女の注意をひくように手をひらひらと振った。
「そう簡単に見つかるような尾行はしてないよ。でもあんまり見ないほうがいいね。・・・俺たちが本当に沈黙を守るか確認したいんじゃないかな」
「そう・・・そうよね。陛下に信じていただけるだけのものが、私には何もないもの」

没落貴族の娘がいくら誓ったところで、口外しないことを証明するものもなければ実績もない。
一時の金目当てに、誓いを破って情報を売ると考えられても仕方なかった。
そのあとでどんな処罰が待っているかなんて恐ろしい想像しかできないが、己の欲望のために身を滅ぼす底辺の貴族がいることを、クリスは知っている。
ヴァンは馬車の背もたれに身を沈めて足を組んだ。
「あんただけじゃない。俺だってただの冒険者で、この国の人間じゃない。ギルドのランクなんて上の人間にとっちゃ、所詮仕事ができるかできないかの基準でしかないしね。金で動く俺たち冒険者を信用しろってほうが無理」

正論だが、自身のことをあっさり信用できない人間だと判断する彼にクリスは悲しい気持ちを覚えた。
たしかに乱暴狼藉の代名詞のような冒険者も多い。
けれどクリスはヴァンに傷つけられたことはないし、護身用に身代わりの彫像という貴重な道具を譲ってもらった。
それにクレナダ村のときも、2日前の事件のときにもずっと守ってくれたのだ。
だからクリスは、ヴァンが誰かに告げ口するような人間ではないと信じている。
「私はあなたのことを信用しているわ」

きっぱり言うと、ヴァンは虚をつかれたような表情をした。
これだけ顔を合わせておきながら疑っていると思っていたのかと、クリスは少し腹立たしい気になったが、先に約束の用事を済ませてしまおうと口を開く。
「それじゃあ一度私の家へ戻ってから、あらためて外出しましょう。着替えているあいだの時間は、応接の間で待っていてもらってもいいかしら」

ヴァンは少し間をあけて、ゆっくりとした口調で言った。
「・・・中に入っていいの？」

クリスはいぶかしげに答える。
「お客様を外で待たせていられるわけないでしょう」
「冒険者を入れたがらないお貴族様は多いんだけどね」
「うちは格式もないし、部外者を入れないほど警備が厳しいわけでもないわ。それに招いておきながら放置するなんて失礼すぎるもの」
「そっか」

そう言ったきり、ヴァンは男爵家に到着するまで口を閉ざした。
クリスも御者に進路をギルドから実家に変更する旨を伝えたあとは、会話の糸口を見つけられなかった。

身軽な服装に着替えたあとヴァンに連れられて訪れた喫茶店は、以前打ち合わせに利用した店よりも落ち着いた雰囲気だった。
丈夫な石材の建物が多い皇都では珍しい木造で、こじんまりとしている。
中に入ると美しい飴色をした木目の机がいくつか並んでいる。
客はあまり多くないようだ。
「前に皇都で依頼受けてたときに、たまたま見つけてね。料理にはずれはないし、静かでいい店だよ」

前の席についたヴァンがそう言った。
もとから机に置いてあったメニューを開くと、見慣れた品目が並んでいる。
クリスは連続で予想できない料理に挑戦する気はなかったので、ほっとしながらうなずいた。
「そうみたいね。大通りから何本か道をはさんでいるおかげで騒がしくないわ」
「そうそう。隠れ家みたいでいいっしょ」

子どものような表情でヴァンが笑った。
こんな顔もできるのだと驚いたクリスは、目をまたたかせる。
「こういうところが好きなの？」
「クリスは嫌い？」
「訊いているのは私なのだけど・・・。いいえ、気に入ったわ。前に行ったお店はたまに行くくらいがちょうどいいんじゃないかしら。普段、学校でもギルドでも人が多い場所にいるから、こんなふうに落ち着ける場所があるといいわね」
「なら、よかった。俺もそんなに人の多い場所は好きじゃないし」

ヴァンの台詞に、クリスはメニューから顔を上げて視線を合わせた。
「そうなの？ギルドの人たちとけっこう話していたから、なんだか意外だわ」

もしや自分のように人見知りなのだろうか。
Aランク冒険者のヴァンが？
クリスは自問自答して、それはないと首を振った。
各地を旅しながら人と交流して依頼をこなす冒険者が、人見知りとは考えられない。
ヴァンが頬づえをついてぼそりとつぶやいた。
「だって、めんどくさいし」
「・・・は？」

予想外の答えに間の抜けたが出た。
ヴァンはため息をつきながら続けて言う。
「冒険者やってるとさ、あちこち移動するから浅い人間関係しかできないわけ。そのくせ噂だけは詳しく流れるから、悪い評判たてられるくらいなら愛想をふるくらい、別に苦じゃない。だけど、いくら人と話すのが苦手とかじゃなくたってさ。毎日それだとうんざりしてくるんだよ」
「・・・・・・」

クリスは無言で頭痛のしてきたこめかみを押さえた。
それはつまり外面がいいということだろう。
今まで守ってくれているヴァンを、無意識のうちに聖人君子の枠に収めてしまっていたらしい。幻滅はしないが、自分への対応が親切心ではなく愛想からのものだとわかるのは気分がいいものではない。
「それなら無理に私との約束を守らなくてもよかったのに・・・」
「無理はしてないけど？」

きょとんとヴァンが目を見開いた。
「クリスは話してて楽だよ。おべっか使わなくても怒らないし、ウソをつく必要もない。っていうか、それならこの店に連れてこないからね」
「えっと・・・それなりに私は認められていると思っていいのかしら」

うまくヴァンの言葉を飲みこめなかったが、クリスはそう解釈した。ヴァンもうなずく。
「そうだね。貴族なのに屋敷に招いてくれるような子はすごく貴重だよ」
「貴重って言われても、貴族としてあなたに何かしてあげられることはないわよ？自分で言うのもむなしいけれど、うちは没落して久しいのだから」
「そういう意味じゃないよ。普通に話せるのが貴重だって言ってるんだ」

貴族の子女は幼いころ「冒険者は粗野だから近づかないように」と躾けられる。
それは親や雇った家庭教師からほどこされるもので、防犯的な意味合いがあった。
魔物退治などをする冒険者は乱暴な態度を取る人間が多く、下手な態度を取って逆鱗に触れて怪我をさせられないように。
また、貴族や金持ちの子どもばかり狙って身代金を要求するような、冒険者とは名ばかりの人間に関わらないように。
そう教育されて育つと、冒険者に対して恐怖心を抱いたまま大きくなる。
だから彼らはやむなく冒険者に依頼ができたとき、居丈高な態度で怯えを見せないように対峙するのだ。

クリスは実家の財政難から仕事を選んでいられなくて、高い賃金を払う夜のギルド受付係をアルバイトにした。
そのおかげで乱暴なしぐさや口調の冒険者でも、性根は気持ちよい人たちもいると知ることが出来たのである。
だから彼らに対して必要以上に警戒しない。
ヴァンが言うところの普通に話せるのが貴重というのは、そういうことだろう。
クリスはそう納得した。
「そうね。貴族らしくないのは認めるわ」
「うん、こうやって一般の民みたいな服着てるクリスのほうがしっくり来るよ。城にいたときみたいに着飾られると、どう接していいかわからなくなりそう」

皇帝陛下相手に普段の冒険者の衣装で対面して、さらに対等な口を聞いていた男の言葉とは思えない。
現にヴァンは軽くからかっているのか、いたずらっぽく青い目を細めている。
クリスも声を出して笑った。
「ふふっ。そんなに心配しなくても、あんなドレスはそうそう着ないわ。一張羅なのよ？」
「そりゃ安心だね」

ふたりで顔を見合わせて、また笑った。

調子はずれの鼻歌を歌いながら、くすんだ金髪の男が手の中のものを見る。
彼のざんばらになった髪は適当に編みこまれているだけで、あちこ

ちに飛び跳ねていた。

男がいるのは皇都の裏路地にある一室だ。
もともと別の住人が住んでいたが、その者は彼の背後で物言わぬ骸と化していた。
その人間が男か女かも判別がつかないほど、鋭利な何かで切り裂かれ、引きちぎられ、臓腑をまき散らしていた。

死亡してからそれほど時間がたっていないのか、濃い血臭が部屋に充満している。
男はそれをまったく気にする様子はなかった。
血だまりの上に座り込み、薄汚れた服を床に脱ぎ捨てる。
すぐに衣服は血を吸って、どろりとした赤黒い色に染まった。

続いて彼は裸のまま無造作に歩いて部屋を物色する。
サイズの合う白のズボンと、黒の上着を見つけると嬉しそうに身に着ける。
着ることが出来れば構わないと言いたげに、それが男物か女物かは関心がないようだった。

新しい服を調達し終わると、彼は再度視線をずっと握っていた手元に戻す。
それは男が河原から拾った、なんの変哲もない手のひらほどの鉱石だ。
川底で石同士ぶつかりあい、磨かれて丸みを帯びた石は不透明な鈍い輝きを放っていた。
彼は楽しそうに石を手のひらの上で転がす。

一回転。
石の内側に複雑な記号が刻まれた。

二回転。
石の表面に幾何学的な模様があらわれた。
三回転。
記号と模様を際立たせるように、石は透明になった。

男は満足げに左右から石を観察する。
「んっん～。こんなもんデショ。ボクって天才」

自画自賛しながら片方の腕の袖をめくり、軽くかかげた。
その瞬間、風が唸って男の手のひらを切り裂く。
鮮血があふれ出し、彼の頬に飛び散った。
さらに腕を伝って肩まで血にまみれる。
「ちょっと切りすぎたカナ？まあいいカ」

痛みを感じていない口調で、男は無造作に石に血をたらした。
模様の上に広がった血液は石の表面を滑らずに、海綿のように吸い込まれていく。
やがて透明だった石は赤色に染まり、続いて深い紅になり、最後には紫色に変貌した。

それはクリスたちが魔術学校の地下で発見した、あの石に酷似している。

彼は―――ヴァンに名前はないと言った男は、手の中の石を大切そうに見つめる。
「今度は時間かかったケド、やっぱりなんでも丁寧にするのがいいヨネ。もっと手をいれてもいいカナ・・・」

そう言いながら石を撫でる。
その頃には男の腕に走った裂傷は跡形もなく消えていた。

治癒の魔法を発動した様子もないのに、腕には傷跡すらない。
血の跡がなければ怪我をしたとは思えないほどだ。
「うん、そうダネ。もう少し手を加えタラ、きっともっとよくナル」
ひとりで納得した男は、さっさと歩いて部屋を後にした。
扉を開けて外の路地に出る。
太陽が真上から強烈な光を浴びせていた。

遠い大通りからここまで、人々の営みの声が聞こる。
暑いくらいの日差しだ。
彼はまぶしそうに手を顔の上にかざしながら、さらに路地を進んでいった。

途中でこの辺りに住んでいる住人らしき女たちが、数人集まって噂話をしているところを見つける。
彼は小声で魔法を発動する呪文を口ずさみながら、跳ねるようにその場を横切った。
男が通りすぎた途端、女たちの体から血が噴き出す。
まとめて風の魔法によってずたずたに切り裂かれ、ただの肉塊に成り果てた。

それを見もせずに、男は路地裏のさらに奥へと進んでいった。
特に彼に目的地はない。
ただふらふらと奥へ行きながら、出会った人間を殺していく。

十数人殺したあたりで、周囲が騒々しくなってきた。
遠くから人の叫び声や、鎧がすれ合う金属質な高音が聞こえてくる。
ようやく死体を見つけた人々が騎士団を呼んだのかもしれない。
「うるさいナァ。もうちょっと殺し足りなかったノニ、仕方ないナ」

男が手に持っている石の色を見ると、紫色にところどころ黒色が混じっている。

「前は地面のなかだったカラ、今度は高いところがイイナ」

楽しげにそう言った彼の姿は風に紛れて消えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3092y/

ギルド受付嬢の冒険

2011年11月10日12時20分発行